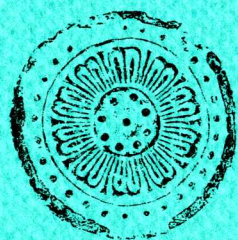


大分市歴史資料館年報



1993年度

は　じ　め　に

平成4年度の年報をお届けします。

本年度は、歴史資料館開館5周年を記念いたしまして、記念特別展「覇権をめざした英雄たち—大友宗麟とその時代」を開催いたしました。関係機関の御協力によりまして、大友宗麟ゆかりの品々を借用展示することができました。約400年ぶりに府内に里帰りした品々といえます。併せて、大友氏と覇権を争った毛利・龍造寺・島津氏などの遺品も展示し、大友宗麟の時代の九州・府内を偲んでいただくことができました。特別展は市民に好評を博し、成功裏に終えることができましたことを、市民及び関係者に深く感謝いたします。

さて、調査研究面では「府内及び大友氏関係遺跡調査事業」がスタートいたしました。各分野の専門の先生方の指導を受けながら、調査を進めてゆきますが、本年度は杵原八幡宮周辺地域を対象として調査を行いました。継続事業ですので、毎年の成果を研究年報として公表し、順次展示にも生かしてゆくつもりであります。各位の暖い御支援と御協力を今後ともよろしくお願いいたします。

展示・講座・資料収集保存・調査研究活動など事業量は増加の傾向にありますが、大分市の歴史を学び、保存・活用をはかる施設として、職員一同努力しているところであります。市民の皆様の暖い御理解と御支援をよろしくお願いいたします。

1993年3月31日

館　長　木　村　幾多郎

目 次

展 示	1
常設展示 特別展示	
講演記録「パネルディスカッション」	8
資料調査	12
研究ノート	18
教育普及活動	23
ふるさとの歴史講座 史跡見学会	
夏休みジュニア講座 陶芸講座 はた織り講座	
拓本講座 歴史を映画でみる会 刊行物	
博物館実習 資料の利用・貸出	
資料収集	26
図 書	30
資料館利用状況	36
管理及び運営	38
歴史資料館協議会 組織・職員	
予算 施設管理業務の内容	
施設の概要	40
条例・規則	42
日 誌 抄	48
利用案内	50

展 示

常設展示

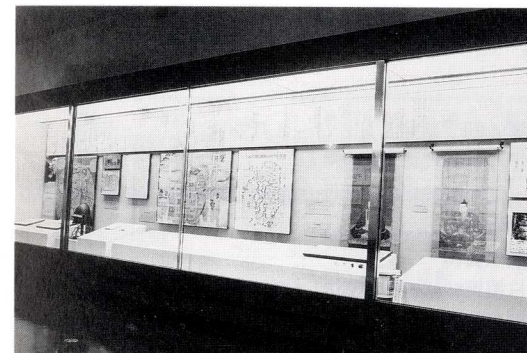
当館は本年度4月に開館5周年を迎えた。これを機として、常設展示のうち中世・近世部門を以下のように改装し、テーマ展示室を新設した。また、パソコン学習室に新システムを導入した。

(1) 大友宗麟と中世

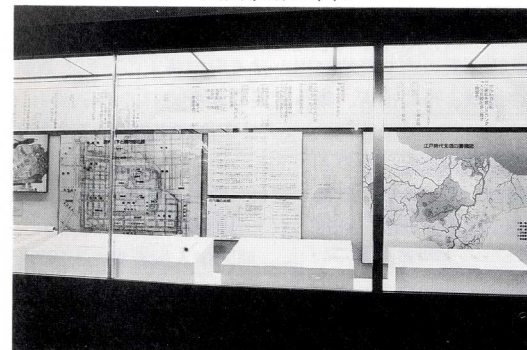
これまでの展示に、11代大友親著画像（模写・原本大智寺蔵）、久保文書のうち義鑑・義鎮・義統3代の文書を加え、大友氏22代にわたる歴史を紹介し、「南蛮文化と府内」・「市内の荘園」の小コーナーを新しく設けた。

「南蛮文化と府内」では、天正年間のイエズス会報告書、南蛮兜を展示し、府内のコレジオ、天正遣欧少年使節の足跡などを写真パネルで紹介している。

「市内の荘園」では、豊後国図田帳（複製・原本大分県立大分図書館蔵）と由原八幡宮領賀来荘千代丸名に比定され、鎌倉～室町期の建物跡が見つかった宮苑遺跡の復元模型を展示し、市内の荘園一覧・由原八幡宮荘園分布図と合わせて、中世の土地制度をわかりやすく解説している。



大友宗麟と中世



江戸時代の大分

(2) 近世の府内

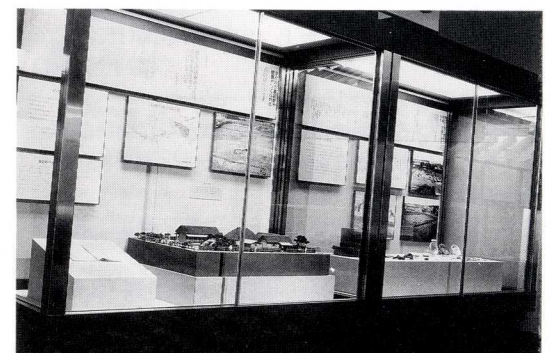
ここは、大きく「江戸時代の大分」と「農民の生活」の2コーナーに分かれている。

「江戸時代の大分」では、まず市内の藩領域図と各藩の藩札から小藩分立であった大分の特徴を描いている。そして、府内藩を取り上げ、歴代藩主書状や城下の様子が描かれた「別府湾岸鳥瞰図巻」を展示。パネルで府内藩の仕組みを解説している。また、鶴崎町絵図（写真パネル）と細川氏御座船入港図から熊本藩の役所がおかれ、海上交通の拠点として栄えた鶴崎町を紹介している。

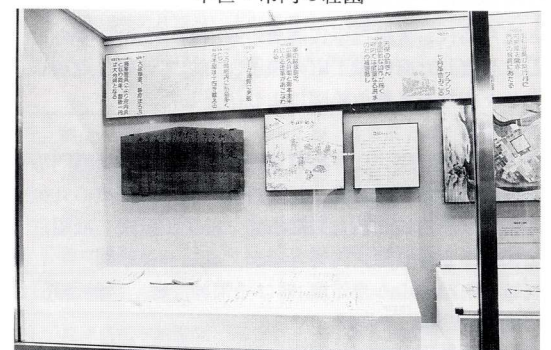
また、「農民の生活」では、年貢割り付け状・年貢皆済目録、困窮者御歎帳、印形帳などから年貢の催促に追われ、細かな点まで規制を受けた農民の苦しい日常生活を取り上げた。

(3) パソコン学習室

これまでは1台のパソコンで1種類のクイズしか学習できず、6種類ある歴史クイズに挑戦するには、6台のパソコンを回らなければならなかった。そこで、パソコン本体に新機種を導入し、1台で6種類のクイズが全部できるように機能をアップさせた。



中世・市内の荘園



農民の生活

テーマ展示

本年度より新たに実施した。開館から5年間に収集し、これまで展示していなかった新資料を中心に、テーマごとに、年4回約2ヶ月ずつ行った。

第1回 期間 7月28日(火)～8月30日(日)

①南蛮文化とキリシタン

1543年のポルトガル人種子島漂着、1549年ザビエル来日に始まった日本と西洋との交流の成果を示す美術品やその後の豊臣政権・江戸幕府によるキリシタン弾圧の歴史を紹介した。

展示資料

狩野内膳筆 南蛮屏風(模写)／花鳥文螺鈿蒔絵洋櫃 南蛮人図鏡／南蛮鐔3点／ランタカ砲／弘化4年キリシタン禁令高札／慶応4年キリシタン禁令太政官札(五榜の掲示第3札)／トリゴー著『日本におけるキリスト教の勝利』(以上当館蔵)

②古地図にみる日本

16世紀後半から17世紀前半にヨーロッパで出版された日本を含むアジア各地の地図を展示し、当時の西洋人がどのように日本を認識していたかを示した。

展示資料

オルテリウス アジア図(1570年)／同 東インド図(1570年)／同 タルタリア図(1570年)／ティセラ日本図(1595年)／スピード 中国・日本図(1623年) (以上当館蔵)

③源氏物語絵 その1

所蔵している23面の源氏物語絵のうち、物語前半のハイライトにあたる5面を展示した。

展示資料

巻2 帚木／巻3 空蟬／巻5 若紫／巻6 末摘花 巻8 花宴(以上当館蔵)

期間中入館者数 2,179人

第2回 期間 9月5日～10月17日

①府内の城と寺社

江戸時代、大給松平氏藩政の政治的・経済的中心として発展した府内城下町の様子、そして近郊に点在していた寺社を各種の絵図により紹介した。

展示資料

府内城下町絵図／江戸幕府城郭修理許可書／諸櫓門等絵図帳／船奉行屋敷図／船入倉図／府内城元東の丸御殿指図／府内城北の丸御殿指図／松栄山絵図／祇園宮絵図／浄安寺絵図／円寿寺絵図／春日神社絵図

(城下町絵図のみ当館蔵。他は松栄神社蔵 当館寄託)

②源氏物語絵 その2

巻11 花散里／巻12 須磨／巻13 明石／巻14 蓬生 巻16 関谷／巻18 松風 (以上当館蔵)

期間中入館者数 3,058人

第3回 期間 12月8日～1月31日

①松平忠直

江戸時代初め、29才の若さで府内に流され、一生を終えた元福井藩主松平忠直の遺品ならびに関係資料を展示し、配流生活の一端を紹介した。

展示資料

松平忠直画像(複製 当館蔵 原本浄土寺蔵)／梨子地卍文蒔絵鏡／葵紋入り鏡／葵紋入り杓／能面2面 花鳥図色紙／熊野権現縁起絵巻全13巻

(以上 熊野神社蔵 当館寄託)

②滝廉太郎

明治時代、「荒城の月」・「花」など数多くの名曲を生み出しながら、23才でこの世を去った滝廉太郎の遺品を展示した。なお、資料はすべて廉太郎の妹安部トミ氏から大分市に寄贈されたものである。

展示資料

眼鏡／肘あて／自筆楽譜「花盛り」／同「海辺の納涼」 同「四季の滝」／吉良夫妻あて書簡／少年時代からドイツ留学ころまでのオリジナル写真(以上当館蔵)

③源氏物語絵 その3

展示資料

巻21 少女／巻27 篝火／巻29 行幸／巻38 鈴虫／巻39 夕霧／巻40 御法(以上当館蔵)

期間中入場者数 1,551人

第4回 期間 2月6日～3月28日

①江戸時代の古絵図

江戸時代に作られた国絵図、村絵図、合戦絵図等を展示した。

展示資料

日根野時代府内藩領図／豊前今井元長船合戦図／豊後細見絵図(以上当館蔵)／竹中村絵図(橋本吉秀氏蔵 当館寄託)／嘉永井路絵図(下宗方区蔵 当館寄託)

②御城下絵図

江戸時代、毎月8月に開かれていた由原八幡宮の祭礼市「浜の市」見物に出かける府内藩主の行列と道筋の情景、市の出店、集う庶民の姿を描いている。

(大分市指定文化財 当館蔵)

③源氏物語絵 その4

巻41 幻／巻43 紅梅／巻44 竹河／巻46 椎本／巻49 宿木／巻52 蜻蛉(以上当館蔵)

期間中入館者数 2,588人

講演記録

パネルディスカッション「戦国大名大友宗麟－その実像に迫る」

11月3日、大分市教育委員会主催のもと、大分市コンパルホールの文化ホールを会場に、シンポジウム「戦国大名大友宗麟－その実像に迫る」を開催した。

このシンポジウムは開館5周年記念特別展「覇権をめざした英雄たち－大友宗麟とその時代」の一環として実施したもので、大分大学名誉教授渡辺澄夫氏、法政大学教授芥川龍男氏、国立歴史民俗博物館教授宇田川武久氏、比治山女子短期大学教授松下正司氏の各講師をお招きし、「大友氏と豊後」、「大友宗麟の領国支配」、「大友宗麟と大砲－鉄砲の伝来について」、「中世都市の発達－草戸千軒と中世考古学」の内容で講演をしていただいた。その後、別府大学教授後藤宗俊氏、大分市教育委員会社会教育課主幹秦正博氏にコーディネーター、パネラーとして加わっていただき、上記のテーマで討議を行った。以下の内容は、その時の内容を録音テープからおこしたものである。

尚、各講演の内容については別誌「FUNAI－府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報Ⅰ」に掲載している。

司会（後藤）ただいま紹介いただきました後藤です。コーディネーターということであります。私自身、先程紹介いただきましたように考古学が専門でありまして、歴史に関わる者として格別の関心を持っているファンの一人ではありますが、「大友宗麟とその時代」といえば全くの素人でございます。今日は会場の皆さんと先生方との間を取り持つつもりでコーディネーターを勤めさせていただきます。午前中から先生方の非常に熱のこもった、しかも密度の高い話をしていただきまして、皆さんも幾らかお疲れのことと思いますが、もう1時間程お付き合い願います。これだけの先生方に話を聞く機会もそうございませんから、色々と話をしたいことがあります。例えば大友宗麟の人間像、これも非常に幅が広く多面的な部分をもっておりまして、大変興味の尽きない問題であります。また大友時代というのは大分県の歴史のなかでいわばひとつの栄光の時代でもあります。如何にして6ヶ国守護や九州探題という栄光の時代を築き得たのか、また同時に非常に劇的に滅んでもおり、栄光と滅びの両面を持っておりまして、その辺りにも検討すべきたくさん問題があるだろうと思います。それからキリスト教徒との関わ

りの問題、南蛮貿易の問題、限りなくあるわけですが、時間も限られておりますので、コーディネーターの独断と偏見でテーマを1つに絞ってみたいと思います。そこで現在の大分の街で、一体大友の遺産といものがあるのか、或いはないのか、それが1つの問題でもあります。もしあるとすれば、これからそれをどう引き継いでいけばいいのか、ということもあると思います。それで皆さんのお手許にございますレジュメをご覧ください。その一番後ろに大変素晴らしい図面が付いております。初めてこういう図面を見る方もおられると思います。この手の図面といいますのは、最近こちらにおられます秦先生が中心になって編纂されました『大分市史』でも違った形で出ております。今日は、この図面を見ながら、実際に大友時代の街、その館とか町屋とか武家屋敷とかそういったものを、一々、その根拠もある程度検証しながら考えてみたいと思います。またその手掛かりがどういった風にあるのか、先生方の話を色々とお聞きしてみたいと思います。その中でうまくいけば、大友の支配の特徴みたいなものも出て来るかもしれません。実は午前中に渡辺先生が大友時代の府内ということで触れられたんですが、そこで府内城下古図というものを話されました。地上には何もないものを復原していく時に、手掛かりとなるのが絵図とか資料とかいうことになるわけですが、この府内城下古図を見ると、大友時代の街がどこにどんな風にあったのかおおよそ知ることができます。この古図を会場におられる皆さんがそれを見ようと思えばどこで見ることができるのか、またその資料はどのようなものなのか、渡辺先生お教え願えませんか。

（渡辺）皆さん方が府内古図を手っ取り早く見ることができるのが『大分県郷土史料集成』です。その地誌編の中に「旧府内城下図」というのが載せられております。これはもう出版されております。それからもう1つ、ただ今、資料館の方に陳列されております大友時代末期の古図（「元府内之図」）の写しがあります。これはかつて市長をされていた高山英明さんが写されたもので、現在勢家町におられる高山英明さんの長男高山虔三さんが所持でございます。私の『豊後荘園公領史料集成（五・上）』の中にその縮小したのものを載せております。いずれも後世の写しであります。特に郷土史料集成のものは定規をあてて描いた様なもので、我々も今まで余り信用していなかったわけです。天正14年島津軍に府内が焼かれた数年後の記録として今日「参宮帳」が残されています。その中に、府内に唐人町の誰々、上市町の誰々、或いは稲荷町の誰々と

というのが出て来るわけなんです。その町はほとんど皆絵図の中にある町なんです。そういった点から、この2つの写図は若干異なりますが、ある程度の真実性を持っているものではなからうかと最近信じて研究に利用しているわけでございます。出典は分かりませんが、その描かれた原図というのは恐らく大友時代末期のものではなからうかと思っています。しかしその原図が今日まで見つかっておりませんから、断定的なことは申されませんけど。

（後藤）どうもありがとうございます。そうしますと『大分縣郷土史料集成』とか『豊後荘園公領史料集成』に載っているもので、皆様はご覧になることができるわけですね。この古図と明治20年代の字図、それから先程の話にでました天正16年の参宮帳に出て来る町の名前とか、そういうものを重ね合わせて出来上がったのが、レジュメにある図面というわけです。この図面には現地の地名とか地形図が入っておりませんので、土地観のある所で、秦先生もう少し説明していただきたいと思うんですが。

（秦）今、渡辺先生がおっしゃいました様に、模写の図しか残っていないということでございまして、ある模写図（高山氏蔵）には文政12年に最初の模写をしたというような注記のあるものもございます。また東大の史料編纂所に伝えられているものは天保5年の写しという風に聞いておるわけです。いずれにしても江戸時代の後期のものです。それで絵図に載っている府内の戦国時代の街が本当にあったのかどうかということで、実際現地におとしてみるとという作業を若干してみました。例えばお寺の位置で、今、大智寺というお寺さんが残っておりますが、そういうお寺さんなどを手掛かりに、その位置関係、距離関係といったものを押さえてまいりますと若干違うところもあるんですが、地図の位置関係と今の位置関係とそう違わない所に位置しているわけです。そうしたことで、これはなかなか信用できるものではなからうかと、そんな感じかいたしまして、現在の大分市の2500分の1の地図の中に落とす作業を試みたわけです。それを縮小していったのが、レジュメの図面のもとになるわけです。絵図のなかに万寿寺が描かれておりますが、もちろんこれは現在の金池町にあります万寿寺ではございません。位置関係で申しますと10号線の側に帆秋精神病院がございましたが、大体その敷地の位置が絵図に描かれた万寿寺という風にお考えいただきたいと思います。その横にお蔵場とか、大友の館とかがございますが、これは現在の九州乳業の西側ぐらいとお考えいただければよろしいかと思います。一部大友館は鉄道を越え

て、現在の錦町にかかります。したがって万寿寺と大友館の間を通る路が、ぴったりではございませんが、大体今の国道10号線がその方向を走っている、このようにご理解いただけますと、およそこの辺りかなとお分かりいただけるのではないかと思います。調度、万寿寺の南側に白蓮池という池がありますが、そのさらに南に大臣塚というのがございます。これが皆さんもご存知の通り、芸術短期大学、昔の大分大学の経済学部のグラウンドのすそに位置する前方後円墳です。ところで私も何度かお話をする機会を得るんですが、その時に中世の街の名前が残っているんですが何という街ですかとお尋ねしますと、皆さん詰まるわけです。実はなにかあるかと申しますと、「もと町だった所があるでしょう」という風にお話し、元町という名前をご理解いただいているわけです。この元町をはじめ、顕徳町、錦町、坊ヶ小路、さらに塩九升にかけての一带が当時の府内の街のおおよその姿になるだろうと思われます。それで地図にこれを落としてみますと、大体町割りの構造が目の中に飛び込んで来るわけで、格子状の街づくりの構造がよく理解できるわけです。大体今の様子と引き合わせるとこんなことになるかと思

います。

（後藤）お分かりでしょうか。そうして見ますと、レジュメの図面の左下に大正7年の地形図がありますが、今のお話のあった所はほとんど田んぼと小さな集落が展開しておりまして、大正の頃までは完全な農村集落であったことが分かります。その西の方に江戸時代の府内町、後の大分市が展開していき、近代都市化して今の様な状態になったという風にとらえておきたいと思っています。それでもう少し先生方のご意見をいただきたいと思いますが、やはりどうしても注目したいのは、御屋敷、或いは上原館という名前で出てきます大友館のある場所です。これは大友氏の最初の館と言ってもいいかと思いますが、現在上野ヶ丘高校がある台地のすぐ北側にあり、ここに居られる先生方もほとんど現地を踏んでおられると思いますが、この御屋敷をご覧になって、芥川先生、どんな風にお考えになりますか。

（芥川）そうですね。「二階崩れの変」というもので自分なりにイメージをもってみたんです。はっきりとした証拠がないと何も言えないんですが、博多の豪商島井宗室やルイス・フロイスもこの館に来ています。本件の調査員でもあられました大先輩の久多羅木先生が『上野原館史』という調査報告書を戦前にお出しになっておりまして、その中にある1つの記録に、フランシスコ・ザビエルが大友宗麟の強い要請によって大分に招かれ、国司の御殿すなわち大友館に着いた

と、そうすると100人余りの大友の家臣らが槍や長刀をたて、また両刀を帯びて列を正して迎えた、それから建物の中に入り、長廊下にいった時、ひざまずいて携えた諸道具をさざげたと、そしてかくも敬意を持って接する日本人を見たのは初めてと、こうあります。それから広庭にいったとあり、さらに導かれ他の部屋にいったと、ここでは国老いわゆる家老級のもので三度頭を下げザビエルらにお礼をおくったと、そしてその部屋を出ると、一の廊下があったと、一の廊下とありますから、それ相当の廊下があったと思うのですが、そこを過ぎると、蜜柑或いは他の樹木などで飾られたもの、いわゆる生け花でしょう、それが飾ってあったと、そしてここに国主の弟が迎えに出て来たと、こうして多くの座敷を越え、ようやく対面の間にいったといえますから、相当広大な造りだったことが分かります。その他、少し後の記録で「豊陽志」というものがありますが、その中に「大友家年中行事」という、改易を受け水戸に蟄居した吉統が、ともに連れてきた堪忍衆と呼ばれる侍とともに、大友家の色々な今までの仕来りを書き記したのではないかとされる記録なんですが、そこに元日の仕来りとして朝四ツ時に一門の大名衆、それから色々役職に就いていた人々のあいさつがあり、そして大書院の上位に、大友の当主が束帯姿で出て来るとあります。それから敷居の外の一畳目に太刀や目録を置き四畳目にすすみお辞儀をし、畳2枚隔たった所で、当主に、宗麟でしょう、お盃を頂戴すると、その間烏帽子・素襖・小刀をさしての正装で出るのだということが書いてあります。更に中の間というのがあり、その外の畳2枚目の所でごあいさつをし、そこで又、盃を頂戴するとあります。また御小書院というのがあり、ここでは同門衆62家、国衆37家、庶家150家の内から由緒の者が一人づつ太刀の目録を捧げ、それを敷居の外の一畳目で披露し、4畳目に下がって礼をする、それからお盃を三方に受けていただき退くとあります。さらに居間があり、そこに入る時は仮の間という部屋で小役人たちにあいさつをするのと記されています。これをシュミレーションで活かすと、どうなるかと思うのですが、今はこの程度の記録しかないわけです。ちょっと発掘で柱穴などが

であれば大したものなんですけれども。

（後藤）ありがとうございます。ただいまの話は情景が何かに浮かぶような内容であります。これだけの文献があるとなりますと、私自身、考古学の方ですが、この場所で探せと言えば非常に楽しみな場所です。実は私、昭和30年代にすぐ側の上野ヶ丘高校で教師をしておりまして、千人風呂前というバス停がありまして、いつもそこで降りていました。その頃ま

では堀が見事に残っていた記憶があります。今はほとんど民家が建ち込んでおりますが大正7年の地形図をみますと、館の中はまっさらです。ごく最近まではほとんどが手付かずの場所だったわけですが、現状はご覧のとおりです。松下先生こういう場面での遺跡調査というのは如何なものでしょうか。

（松下）昨日、木村館長にご案内いただいて拝見したのですけれども、土塁状のものがよく残っております。それから堀がはっきりしております。現在家が建っておりますから大変難しいと思いますが、さきの大正7年の地図を見ても空白になっています様に恐らく遺構が残っている可能性があると思います。それで問題は現在建物がありますから、簡単には掘れないわけですが、私は本当に機会があれば少しでも家の建っていない部分にトレンチを入れてみられると、すぐに分かるんじゃないかという気がいたします。

（後藤）渡辺先生、この館がいつ頃からいつまであったのか、大体のところは分かるんですか。先生自身、どの様にお考えになっておられますか。

（渡辺）永禄5年に宗麟が臼杵に移るわけですが、その後この館は息子の義統に譲られ、平素の住まいとされたのではなからうかと考えております。この辺りの事情は正確な証拠がありませんが、そのように考えております。

（後藤）上野の丘陵に館がありまして、もう1つそれからずっと下った元町の所に、大友館というのが先程の古図の中に現れてきます。両方一緒にあった時期、使い分けられた時期というのがあったのかもしれないわけですが、いずれにしても下の大友館は非常に大きい。一辺およそ200m、したがって4町歩ぐらいを占める壮大な館になるかと思っています。以前、万寿寺のあった所から溝が出まして、そこにびっしりと物が入っている状況を見ました。この時の感想から非常にいい状態である当時の遺構が残っているのではないかという感じを持っております。それで宇田川先生、こうした戦国期の1つの街の様子をご覧になって、どの様にお感じになられているのかちょっとご意見を願いたいします。

（宇田川）そうですね。私は考古学とか、歴史の、とくに大友に詳しいわけでもないのですが、これはお答えになっているか分かりませんが、先程芥川先生のお話の中に、長刀とか槍が出てきましたが、例えば長刀などというのは、戦国期のある段階になるともう使われなくなるわけです。また中世的な館だとかお城では、余

り武器類は置かれませんが、それが近世になると、そういったものが逆に置かれるようになっていきます。そうすると、それを作る職人といった人々が城下に出てくるわけで、例えばそうした武器職人が城下町の中にいるような形跡があるのかといったことで、町並を含めもう少し総合的に考えられるといいのではという気がいたします。もちろん今後の課題でしょうけれども、地表をはぐ作業のように一枚ずつ現代から遡っていかれると、何か新しいものが分かってくるのではないかと思います。非常に楽しみにしております。

（後藤）はい、ありがとうございます。大友時代の府内ということで、大友館あるいは万寿寺とか、非常に重要な遺構の位置が大体分かっていますと、これから色々な探り方ができる訳ですが、私自身このレジュメにある図面をみて、これは面白いなと思いましたが、図面の一番右、川岸の細かい字図です。ここは田んぼのはずですが、こういう形で残っていることから考えて、町並の跡と考えられますが、これを秦先生はどの様にお考えになれますか。

（秦）そうですね。たしかに奥は細長く、鰻の寝床みたいになっているという形は、近世に入りますと府内城下あたりに典型的に見られます。皆さんもお開きの図面の古国府の地域を見ていただくと、もう1つ同じ様に細かい鰻の寝床状のものがあることにお気づきになられるかと思いますが、そこに「まち」という字名が書かれております。またその入口には「あざまちぐち」という字名がついておるわけです。ここは古国府の集落の入口、豊府小学校付近に当たりますが、これは恐らく中世の頃の町の姿の一端ではないかと、まだ確証もあるわけではないんですが、そんな感じがいたします。そのように見ますと、後藤先生が指摘された部分についても、その様な考え方をした方がいいのではないかと思います。

（後藤）分かりました。この図面は後ほどもう少し遺跡の問題として触れたいと思いますが、私自身、ちょっと先生方にお伺いしたいと思ったことがあるんです。図面の中には町名やお寺など古図に記載された内容が全部押さえられているわけですが、武家屋敷、要するに大友の重臣たちの館らしい名前、或いはその跡とか、そういったものが感じられないような気がするんです。渡辺先生、その辺は如何でしょうか。

（渡辺）私自身もどうして武家屋敷の記入がないのか、非常に疑問に思っているのです。田原氏が府内の「立市」に屋敷を持っていることははっきりと史料に書い

てあります。しかしその「立市」がどこなのかよく分かりません。その他、大友氏の武将の館がどこにあったのかということも、ほとんど記録がないわけです。その点で、私も非常に不思議に思っていて、大友氏の府内の街は町人中心の町ではなかったのかというお話をしたわけです。

（後藤）教科書理解で大変申し訳ないんですが、守護大名から戦国大名へ、或いは中世から近世へという時代の大きな曲角で、大名がやる施策の大きな柱に家臣団集住政策、いわゆる城下町形成ということが行なわれると思うんですが、その在地から家臣を引き離してそれで押さえて行くような行為、また妻子を人質するとか、或いは検地を行うとか、戦国大名が生き残って強くなっていく時に当然やるようなことを、大友氏はなにかに余り行っていないのではないかなと思うんです。その点は、芥川先生、どうなんでしょうか。

（芥川）他の先生方と同様に、重臣団の屋敷がほとんど文献に出てこないし、何とも言えないんですが大友の場合、城下集住策というのは極めて不徹底ではなかったかと思っています。先程の義長条々などの内容からみても、彼等を旗本化する所まではいっていないという風に感じます。朝倉氏の一乗谷の例では川を挟んで南に朝倉館があり、その対岸は整然とした屋敷地となっていたことが分かっています。大友の場合、同門衆や他門衆というものがあながら、それがどのように日常行政に携わったいたのか、細かいところが分からない、これからの問題ではあるんですが、こういう点から考えてみても未熟ではなかったのではと思うです。

（後藤）宇田川先生、先程ちょっと大内氏の場合をうかがったのですが、その点でもう少し詳しく教えていただきたいのですが。

（宇田川）そうですね。大内氏よりむしろ毛利氏の方がいいと思います。毛利氏の場合、非常に興味深いのは、もともと吉田という山の中に居りまして、それから郡山、広島へと出ていくわけです。それは瀬戸内海の支配を目的としたもので、水軍に関しては天文末年から編成しはじめるというようなことがみられます。

（後藤）上野ヶ丘の大友館は、そのすぐ近くに、ひょっとすると古代の国府があったかもしれないという所にあります。しかも大友氏は建武年間に国司を兼帯するという状態になるわけで、そういった点から言いますと、大友氏は古代からものに最後までこだわったというか、動かなかったというか、その様にも感じるん

です。また大友氏が滅びていく過程で入田氏などは公然と島津氏へ内応し、有力家臣もほとんど裏切っていくわけですけど、その辺りの締め付けの甘さみたいなものと、先程の街のかたちというものがどうも重なってしょうがないんです。それで、渡辺先生、大友氏は入田氏が何かやりそうだと分かっている何手も手を打たなかったのですか、その辺りはどうなんですか。

（渡辺）入田義実というのが、今の祖母山の主峰緩木山という所に城を造って籠っていたわけですが、その南側、日向高千穂にいた大神一族と連携して島津氏とはっきり内通するんです。それが「上井寛兼日記」という島津側の日記にはっきり書いてあるんです。今日入田が豊後の絵図までもってきたなどといった事などが書かれており、先方と通々なんです。ところが大友宗麟は三重郷の家臣で久保麟泉という者を使者に派遣し、「お前について色々噂があるんだが、大友に異心を抱いて島津に内通しているということはまさかあるまいな」というぐらいの言い方をするです。大友宗麟はそういう点では非常に甘いんですね。この前テレビで徳川家康が武田氏と度々内通しているということで、自分の長男を切腹させるでしょう。宗麟にはこういった面がないようです。私はそういった点から、宗麟は真の武将といった性格ではなく、文を中心とした性格ではなかろうかという風に感じるんです。キリスト教に入信するように、人を疑わないわけです。この時、入田氏は久保麟泉に「私の親父が殺された時、領地は全部とられてしまった、その後若干復したけれど前よりずっと少ないので何とかそれを復してもらいたい」と要求を出しています。これに対して宗麟は「今要求に応える相談を息子義統としているから」といった返事をだしているわけです。この様に甘さがあることは間違いありません。人に対しても余り疑いをもたない。これは彼の人の良さと言えるかもしれません。大友宗麟は毛利氏のことを、人をいつもだましてばかりいるということで「毛利ぎつね」と言っていますが、宗麟にはそういうところが無いように思えます。

（後藤）宗麟の人間像という話になりますと、いくらでも話があるわけですが、その度ごとに人のよさ或いは毛並みのよさ、また宗麟の知性的な側面というようなものが逆に見えてくるわけです。さらにキリスト教云々というようなことで話も広がっていくとは思いますが、時間も限られておりますので、先程の話にもどりますが、分かりもしない街の成り立ちから余り話を広げるのはどうかなと思うんですが、これからのこの府内の街、或いは大友の遺跡といったものを、どういう風に見ていけばよいかという話に移ってみたいと思

います。中世末の府内の街は、かなり劇的に滅びていくという感じを持つわけですが、秦先生、その辺りのいきさつを説明していただけないでしょうか。

（秦）島津の軍勢が天正14、5年豊後の方へ入ってきたことはご案内の通りです。鶴ヶ城・戸次川原の合戦を経て、義統が敗走すると、恐らく島津軍は府内に入り、街を焼きつくすようなことをやったのではなかろうかと思えます。この時、鶴崎の方で軍勢の手が伸びておりますが、天正14、5年の段階で府内の街は、今、後藤先生がおっしゃったように正に劇的に消滅したと言えます。その後、天正16年の参宮帳や17年、18年辺りの記事に色々と地名・人名が出て参りますので、やや復興した部分もあったようです。それが近世になりまして、福原直高が府内城を築城し、それを受け継いだ竹中重利が慶長7年街づくりを行った際に、この中世の府内の町がその地に引き移されたとあります。したがって、レジュメの図面に落とされた同じ町名が近世の町の中にも引き継がれていると、そのように色々な資料を照合しながら考えたりしているようなわけです。

（後藤）渡辺先生、その後に大地震というのが来るのですかね。

（渡辺）地震は慶長元年のことで、福原直高が府内城を築き始めるちょっと前の年になります。

（後藤）ところで遺跡がどういう状態で埋まっているか考えるのに興味あることなんですが、秦先生、江戸時代の旧府内の状態というのをどういう風にご覧になりますか。

（秦）一言で言いますと、県下最大の城下町が形成されているわけですが、府内城を中心に3つの堀で囲まれていました。いまその内の一番内側の堀が残っているわけですが、調度今の中央通りから若松通りへ曲がります付近に中堀があり、それから竹町の一番外れの都町に行く通りから大分駅前パルコ前に外堀がありました。また北の方は直接海に接しており、よく私はこれを水に浮かんだ街というふうに表現しております。わずか2万石の小さな藩でございますが、そんな街が県下最大の街を築いていたわけです。まさに県都大分の元は、もうこの時期に十分あったという風に考えられます。

（後藤）そうしますと、その状態の時に、大友府内の街は景観としてどんな状態であったのでしょうか。

(秦) 当時それは城下の外になります。近世の府内城下では、町のいくつかをまとめて何とか組という町組を作っているわけですが、先程元町のことも申しましたが、ここは行政組織としては千手堂組という町組のなかに入っております。実際は農村地帯なんですけれども、町組のなかに入っているということは、かつての町のイメージをやや残したままではないかと思ひます。

(後藤) 分かりました。只今の話はこれから遺跡として旧府内町を考えるとときに大事なことだと思います。府内の街が島津軍に焼かれ、地震に遭い、徹底的に破壊されて以後、どの程度再興したかわかりませんが、どちらかと言えば江戸時代は農村となっていたことから、その水田化した跡を一枚めくると、非常にいい状態で遺跡があるのではないかという感じがするんですが、草戸千軒などを掘られた経験から、松下先生、如何でしょうか。

(松下) そうですね。残っている可能性は大きいのではないのでしょうか。結局、街がずっと続いていた場合でも、発掘してみると、確かに埋まっているんです。先程私がお話しました尾道にしましても、軀にしましても、遺跡が分かっています。実際に遺跡がはっきりするまでは遺物が出たとか、遺構が出たとかいう話は全く無かったわけです。軀なんかもそうですけれども、私がたまたまそこで話をいたしました時に、遺跡が埋まっている可能性がありますよということを申しましたところ、軀ではそんなものは一切出ませんとの話だったんです。ところがそれを一年後に実際試掘調査をしてみますと、ちゃんと埋まっているのが分かったわけです。現在生きている街の下、京都、鎌倉、博多、色んな所を含めてそうですが、遺構が残っています。大分の場合、更に残っている可能性が大きいのではないかという気がいたします。

(後藤) ありがとうございます。実は私、こことよく似た、或いはもっと状態の悪い場所で壮大な発掘が行われている博多という所を常に関心をもって見ております。博多駅前から呉服町辺りにかけて博多遺跡という名前を付けまして、延々と発掘を行っているわけです。ここから出た資料の一部が、今回の展示で出品されておりますが、実は博多の町も天正14年、大分と同様に島津に攻められており、博多の遺跡からはその焼け落とされた時の地層も出て来ています。それで同じ年に焼かれた府内の街を発掘しますと、その時の状態という様なものが見えてくるのではないかという感じを持ちました。現地をみますと、遺跡とはとても見え

ない、場所ではありますが、先程の松下先生のお話でもありましたように、最近行われている中世都市の発掘というのは、ほとんどが都市の中で木造の家が鉄筋に建て替わる時か、大きな土木工事が行われる時に掘って現れております。大友の府内の街も、1枚めくれば非常に豊かな可能性を持っているということを確認できるのではないかと思います。そろそろ時間もありませんので、最後になりますけど、今後先生方の立場から、こういう風なことを、この様にやったらどうかということを、一言ずつお聞かせいただけたらと思うんですが。渡辺先生、その点でご意見はございませんか。

(渡辺) 私は以前、郷土史家の立川さんなどと入魂にさせていただいておりましたが、もう十余年になりました。その頃、上野の大友館に大友資料館を造ったらどうかという運動が起きたわけです。それを市の当局者にお話いたしましたところ、余り取り上げていただけてなくて、そのままになってしまいました。大正初年頃の上野の写真を見まして、四方にずっと木が生えていて大友館の形が完全に残っていますが、これを今日の様な個人の屋敷にしまったことは、甚だ遺憾なことです。今からでも屋敷を建て替える場合には、市の方から必ず発掘して大友館の跡を再現してもらいたいものだという風に希望いたします。

(後藤) ありがとうございます。それでは芥川先生から一言。

(芥川) 私も2つばかりこの際希望を述べておきます。1つは資料は極力地元に残すべく努めていただきたいと思ひます。我々も拝見するときは写真にとりますけど、けして拝借はしない、書き写しはしない、そこから動かさないということ鉄則にしてやっております。2番目には今回のこのシンポジウムを企画された資料館で、例えば、展示だけでなく、里神楽の大会や団子汁づくりの技くらべなど、地元に伝わった手作りのものを伝承していく、そういう場としての利用をも今後行っていただきたい。もう1つは、あそこへ来れば、大友関係、或いは豊後の歴史関係の資料のどういったものがあるのか、カードだけでもいいと思うんですが、できればワープロ化・パソコン化していただき、そういったもののセンターとしての役割を一面持っていたら幸いですと思ひます。そうすれば、世界中から資料館を訪れてくれると思うんです。少し大袈裟になりましたが。

(後藤) 宇田川先生にも是非一言お願いしたいんですが。

(宇田川) 私は今、芥川先生がお話になったようなことで大変結構だと思うんですが、今日、私が話をしました、例えば大砲ですが、これは研究も少ないですし、恐らくあちこちにあるんじゃないかと思ひます。それで言いたいことは、ある程度常識的に考えられることは、皆さんがやられますので、例えば誰もがやらないようなことを現地の方が地の利を活かして一生懸命なされると、地域の活性化にもつながりますし、中央の人にも喜んで来るという風なことになるのではないのでしょうか。今回私がこういう話をできる機会をつくっていただいたことは大変有り難いと思ひます。また今後、色んな分野でこういう文化財に関する関心を深めていっていただきたいと思ひます。

(後藤) 松下先生、ある意味でこれからの課題はむしろ先生の領域の方からの課題が多いと思うんですが、如何でしょうか。

(松下) お話しました様に、私共、30年かけまして全く記録のない町を掘って中世の町を再現したわけです。大分の場合は、昨日も拝見いたしました、かなり色んなことが分かってまいりました。これからの調査がやはり大きな意味を持っていくのではないかと思ひます。今かなり市街化しておりますので、実際調査は大変だと思います。しかし、それはそれでいいんじゃないかと思うんです。点の調査が10年経てば線になり、20年経てば面になり、100年経てばもっと大きな街全体がわかるということだろうと思ひます。私共は30年にかけてましたが、こちらの場合は100年かけようと200年かけようとじっくり調査してやっていただければいいんじゃないかと思ひます。草戸千軒の調査が終わりまして、広島県では、今日のお話にも度々出て参りました毛利氏、それからその子供の吉川氏の城跡が広島県の北部の方でたくさん残っておりますが、その調査を中世城館遺跡調査事務所というのをつくりまして、これから数十年かけて進めていく計画となっています。もうすでに吉川氏の館の調査を進めておりますが、やはり遺構が出始めております。こういう調査でありますとか、或いは最近ですと、大変賑わっておりますが、信長の安土城の調査を滋賀県が始めました。やはり私共と同じ様な研究所をつくって調査を始められております。佐賀県では名護屋城の調査をやっておられます。福井県の朝倉氏の城館の調査では、中世の遺跡、特に城館史の調査が大変進展したわけです。山口県の大内氏の調査も市の方でやっておられます。この大友も、是非ちゃんとした調査をやっていただき、そうすればすばらしい成果が出るんじゃないかと期待しております。

す。

(後藤) ありがとうございます。これだけの先生方から話を引き出すには、大変短い時間だったんですけども、私から最後に、これまで諸先生方からいただきましたご意見を、色々な施策の中で活かしていただきたいという風に思ひます。実は途中で会場からご質問をいただいたものをメモしているんですが、時間もございませんし、またこれらは歴史資料館、および文化財室の方でお応えできる内容と思ひますので、よろしければご質問をいただいた方々は直接そちらの方へうかがっていただければ有り難いと思ひます。私、常々大分の街を見て参りまして、大友氏がもし滅びなかったらということをよく思ひます。そうであるなら、大分の街はもっと発展していただろうと。熊本とか福岡を見ていて、よくそれを思うんですが、逆に言えば、我々の住んでいる街というものが、やはり色々な意味で歴史をひきずっていると、そしてそれを繰り返して問い返していかないと、その街づくりというもののビジョンもみえてこないということを感じます。今日は「戦国大名大友宗麟—その実像に迫る」という点では、まだまだ大きな課題がありまして、正直に申しますと、こういうシンポジウムを何年かくり返して宗麟像の実態に迫るというぐらゐのスケールと存在感をもった人物であり、時代でもあらうと思ひます。今日は短い時間の中で、街というものの中で、大友時代というものを考えてみる、そういうことで話を進めてみました。大変拙い進行で申し訳ありません。先生方どうも有り難うございました。これで終わりたいと思ひます。

資料調査

府内及び大友氏関係遺跡総合調査

本年度から新たに資料館の中核的・継続的な調査事業として「府内及び大友氏関係遺跡総合調査」を始めることにした。本調査は、歴史地理学や考古学的調査方法を交えながら、市内に残る中世大友時代の遺跡や遺構、またそれに関連する古文書や石造物などの現況を記録にとどめ、同時にその保存と、大友氏を検証するための基礎的調査としてあり、本年度はその初年度事業として、大友氏の詰城である高崎山城と上野の大友館をつなぐ場所に位置し、かつ大友氏との関係も深かった由原八幡宮を対象に調査を行うことにした。今回はとくに由原宮の僧侶の住まいである坊を中心に調査を行い、その遺構や持仏、また、関係品等の確認を行った。なお、本年度調査の概要は『FUNAI－府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報Ⅰ』に掲載している。

牧家文書調査

本年度資料調査の1つとして、6月17日～19日、旧新貝村庄屋、牧家文書のマイクロフィルム撮影を、大分大学教授豊田寛三氏のご同行をえて行った。文書は、現在、京都市在住の牧立氏によって所蔵され、同氏の資料館への来館を機に、その所在が新たに確認されたものである。同文書には、近世文書（現在16巻の卷子仕立てで整理がなされており、内前半の12巻については、天保12年(1834)牧彌五郎(鎮屋)によってまとめられている）の外、少量であるが、中世文書の写しや明治期の新貝村の地租に関する資料が残されている。また同家には新貝村の絵図数点と牧家系図が所蔵されていた。牧家が代々庄屋をつとめた新貝村は、江戸時代には松平忠直（一伯）領→幕府領→細川藩領→日田藩領→幕府領→牧野延岡藩領→内藤延岡藩領といった変遷をたどり、各時代の資料を収めた牧家文書は、その幕政・藩政を知る貴重な資料ともいえるのである。

牧家文書目録

	内 容	年 号	備 考		内 容	年 号	備 考
1	〈年貢皆済状〉	寛永3年(1626)3月21日	1巻所載	22	奉差上橋木願書之事	年未詳	〃
2	〈 〃 〉	〃 4年(1627)3月26日	〃	23	奉差上一札之事(新貝村百姓善五郎出火の件)	寅12月25日	〃
3	〈 〃 〉	〃 6年(1629)3月15日	〃	24	乍恐奉願上一札之事(新貝村住人新吉出火の件)	貞享5年(1688)6月4日	〃
4	〈書簡〉(新開村庄屋与三兵衛あて渡辺文右衛門書状)	年未詳	〃	25	証文之事(萩原村山三郎女扇溺死の件)	元禄15年(1702)11月4日	〃
5	〈口上書〉(新貝村・乙ッ村・山ッ村・萩原村・下郡村・羽田村の「打たれ」に関する件)	寛永13年(1636)11月11日	〃	26	〈達書〉	貞享4年(1687)4月	〃
6	〈覚〉(男女の傷に関する件)	〃 13年(1636)12月3日	〃	27	覚(高松村住人竹松以下帳面除きの件)	宝永2年(1705)2月	〃
7	〈覚〉(「打たれ」に関する件)	〃 13年(1636)12月23日	〃	28	覚(堤川除御普請人足の件)	元禄14年(1701)11月	〃
8	〈覚〉(人足かわりに関する件)	〃 14年(1637)正月21日	〃	29	乍恐差上仕御書之事(牛馬の皮に関する事)	〃 3年(1690)6月19日	〃
9	〈松平忠直(一伯)旧記〉		〃	30	書物之事(切支丹類族調べの件)	貞享5年(1688)8月13日	〃
10	捨之覚	明暦2年(1656)	〃	31	一札之事(詫状)	延宝7年(1679)5月27日	〃
11	〈覚〉(慶長元年7月9日の大地震に関する件)		〃	32	乍恐申上候口上書之事(田地年季売りに関する件)	〃 6年(1678)7月	〃
12	未ノ平田方永地之覚	未10月15日	〃	33	覚(存不寄公事を被申懸候件)	元禄2年(1689)5月晦日	〃
13	〈日野家に関する件について〉		〃	34	覚(切支丹取締に関する事)	卯8月	〃
14	大地震覚付(宝永4年(1707)10月4日の地震に関する件)		〃	35	〈枅使用に関する事〉	寛文8年(1668)5月3日	〃
15	竹中伊豆守様御検地(慶長2年)		〃	36	可申渡覚(触書)	霜月	〃
16	〈祖母嶽大明神由来書〉		〃	37	覚(触書)	享保6年(1721)6月	〃
17	〈大友因幡守書状〉		〃	38	覚(破魔弓・羽子板・雛等の統制)	9月	〃
18	高松御役所御日記御代々日記		〃	39	覚(触書)	牛4月21日	〃
19	五人組条々	寛文8年(1668)正月	2巻所載	40	差上、申一札之事(松岡組四ヶ村葛木村死牛馬に関する件)	元禄4年(1691)8月25日	〃
20	覚(法度)	元禄元年(1688)12月	〃				
21	覚(煙草作りの件)	〃 16年(1702)正月	〃				

	内 容	年 号	備 考		内 容	年 号	備 考
41	奉誤一札之事(死牛馬に関する件)	元禄4年(1691)8月23日	〃	71	乍恐奉願上一札之事(新貝村庄屋与三兵衛兄岩性引取り願ひ)	貞享2年(1717)12月	〃
42	奉誤一札之事(牛売買に関する件)	〃 12年(1699)7月9日	〃	72	書上事(庄屋高・庄屋給の取決めに関する件)	延宝8年(1680)2月6日	〃
43	乍恐奉願一札之事(大分郡内高松村・原村・山津村・両三川村・今津村・門田村・中島村・千歳村百姓所持の死牛馬に関する件)	〃 2年(1689)9月	〃	73	乍恐奉差上願書之事(新貝村庄屋役交替願ひ)	元禄15年(1702)11月	〃
44	口上之覚(馬売買に関する件)	元文3年(1738)9月	〃	74	差上申覚書(庄屋高・庄屋給に関する件)	〃 5年(1692)12月	〃
45	誤証文之事(新貝村長蔵母屋敷畑質入れに関する件)	廻享3年(1746)5月14日	〃	75	乍恐奉差上口上書之事(新貝村住人と虚無僧との口論に関する件)	〃 7年(1694)4月	〃
46	長兵衛・喜兵衛出入口上之覚書	午8月13日	〃	76	差上申一札之事(当申ノ年酒造米に関する件)	寛文8年(1668)10月27日	〃
47	〈書簡〉(新貝村与三兵衛あて仁右衛門・嘉兵衛書状)	12月16日	3巻所載	77	一札之事(山津村之内高城山御林下草の刈り取りに関する願ひ)	元禄7年(1694)5月20日	〃
48	〈書簡〉(牧孫右衛門あて石泉寺書状)	9月3日	〃	78	奉差上口上之覚(下光永村山論に関する件)	戌6月14日	〃
49	〈書簡〉(〃)	正月15日	〃	79	取替証文之事(下光永村地内字きたい山に関する件)	宝暦4年(1754)6月	〃
50	〈書簡〉(〃)	子正月2日	〃	80	覚(下光永村と立小野村の山論に関する件)	戌6月7日	〃
51	〈書簡〉(牧孫右衛門あて義郎書状)	閏4月2日	〃	81	一札之事(下光永村と立小野村の山論に関する件)	宝暦4年(1754)6月9日	〃
52	〈書簡〉(牧孫右衛門あて親蔵書状)	閏4月2日	〃	82	速見郡御料山浦里右衛門と延岡御領温湯村小兵衛と入割取原济口内済証文	明和2年(1765)10月	〃
53	近所出火之節火消道具役付人数之覚	正徳4年(1714)11月	〃	83	仕上、申一札之事(新貝村内の役に関する争い)	貞享4年(1687)7月21日	4巻所載
54	〈宗門改め控〉	元禄10年～正徳3年	〃	84	乍恐奉差上願書之事(足役御赦免願ひ)	正徳3年(1713)正月	〃
55	永々譲渡し申家屋敷之事	延享4年(1747)10月	〃	85	豊後大分郡元禄二年已御納大豆大坂至送御藏詰諸入用目録)	元禄3年(1690)9月8日	〃
56	乍恐奉差上口上書之事(新貝村住人と虚無僧との口論に関する件)	元禄7年(1694)4月	〃	86	〈慶長十三年大分郡新貝村御検地帳写〉	寛文10年(1670)7月	〃
57	借用申銀子之事	慶安2年(1649)9月	〃	87	豊後国大分郡新貝村差出シ目録(新貝村田畑上中下斗代分米畝数其外御小物成運上家数 男女員数牛馬数の書上)	貞享4年(1687)2月	〃
58	奉差上願書之事(与三兵衛剃髪の事)	享保17年(1732)9月	〃	88	差上、申差出シ目録(新貝村田畑数・年貢・小物成等書上)	寛文9年(1669)8月17日	〃
59	覚(類族改めに関する件)	元禄14年(1701)正月	〃	89	村々永帳断り書之覚	〃 10年(1670)3月19日	〃
60	差上申一札之事(類族改めに関する件)	享保6年(1721)11月19日	〃	90	元禄四年豊後国大分郡新貝村永荒帳	元禄4年(1691)	〃
61	覚(類族改めに関する難形)	宝永4年(1707)	〃	91	亥年免割目録	天和3年(1683)10月13日	〃
62	預り申銀子之事(塩浜の権利譲渡に関する件)	正徳2年(1712)10月	〃	92	丑納方皆済目録	貞享3年(1684)6月	〃
63	当年ノ正月より同六月まで新貝村出銀目録	延宝6年(1678)6月29日	〃	93	子 〃	〃 2年(1685)	〃
64	覚(宗旨改めに関する件)	享保2年(1717)正月	〃	94	請取申已御物成銀之事	元禄3年(1690)3月24日	〃
65	手形之事(宗旨改めに関する件)	元禄15年(1702) 〃	〃	95	覚(山津村高城山横原両所御林之内枝木下草落葉利用に関すること)	酉6月	〃
66	質物ニ相渡ス田地之事	〃 16年(1703)10月	〃				
67	奉差上一札之事(猪野・横尾・二目川村と高松・新貝・山津・津守・片島五ヶ村入会草場山野に関する件)	〃 14年(1701)2月	〃				
68	奉差上願書之事(新貝村庄屋与三兵衛病死にともなう役交替願ひ)	〃 6年(1693)6月7日	〃				
69	替申屋敷之事	寛文10年(1670)7月3日	〃				
70	差上申一札之事(身請け願ひ)	貞享5年(1688)2月24日					

	内 容	年 号	備 考		内 容	年 号	備 考
96	元禄五申ノ御年貢諸小物成納目録	元禄6年(1693)	〃				左衛門代齊田書左衛門(差出人)
97	酉之御年貢御米大豆諸小物成皆済目録	〃 7年(1694)	〃	132	〃 卯之御年貢割付之事	延宝3年(1675)11月16日	〃 / 〃
98	請取申巳ノ年御口米銀之事	寛文12年(1672)2月27日	〃	133	〃 辰 〃	〃 4年(1676)11月17日	〃 / 山田清左衛門(差出人)
99	差上ヶ申差出シ目録	〃 11年(1671)9月8日	〃				〃 / 三田次郎右衛門(差出人)
100	戌年毛揃目録	天和2年(1682)	〃	134	当巳御年貢可納事	〃 5年(1677)12月22日	〃 / 〃
101	去巳之年納申御年貢米合之覚	延宝5年(1677)12月28日	〃				〃 / 〃
102	未之御免割目録	元禄17年(1703)10月	〃	135	当年 〃	〃 6年(1678)10月5日	〃 / 〃
103	申 〃	宝永元年(1704)11月	〃	136	当未 〃	〃 7年(1679)10月29日	〃 / 〃
104	丑 〃	〃 6年(1709)11月	〃	137	〃 申 〃	〃 8年(1680)10月28日	〃 / 〃
105	戌年 〃	寛保2年(1742)10月	〃	138	□年貢可納事	〃 9年(1681)11月	〃 / 〃
106	亥 〃	宝永4年(1707)11月	〃	139	亥歳免定之事	天和3年(1683)9月	〃 / 林基五左衛門(差出人)
107	条々(浦方高札)	正徳4年(1714)11月	5巻所載				〃 / 〃
108	〃 (〃)	〃 4年(1714) 〃	〃	140	子 〃	貞享元年(1684)10月	〃 / 〃
109	〃 (〃)	〃 4年(1714)2月	〃	141	丑 〃	〃 2年(1685) 〃	〃 / 〃
110	定 (〃)	〃 元年(1711)5月	〃	142	新貝村寅年免定之事	〃 3年(1686)11月	〃 / 小野長左衛門(差出人)
111	条々 (〃)	〃 4年(1714)2月	〃				〃 / 〃
112	〃 (〃)	〃 4年(1714)12月	〃	143	〃 卯 〃	〃 4年(1687)10月	〃 / 〃
113	定 (〃)	〃 元年(1711)5月	〃	144	辰御年貢可納割付	元禄元年(1688)11月	〃 / 次郎右衛門(差出人)
114	〃 (〃)	〃 元年(1711)5月	〃				〃 / 〃
115	豊後国大分郡高松より原村浦方出入遂吟味申渡覚	享保15年(1730)10月	〃	145	巳 〃	〃 2年(1689) 〃	〃 / 〃
				146	午之 〃	〃 3年(1690) 〃	〃 / 〃
116	可納戌年御年貢之事	万治元年(1658)11月	6巻所載・小川又左衛門・小川藤左衛門(差出人)	147	未御年貢可納割付	〃 4年(1691) 〃	〃 / 〃
				148	豊後国大分郡新貝村申御年貢可納割付	〃 5年(1692)11月	〃 / 小野長左衛門(差出人)
117	〃 亥 〃	〃 2年(1659)11月11日	〃 / 〃	149	〃 〃 西 〃	〃 6年(1693) 〃	〃 / 〃
118	〃 子 〃	〃 3年(1660)11月8日	〃 / 〃	150	〃 〃 戌 〃	〃 7年(1694)10月	〃 / 〃
119	〃 丑 〃	寛文元年(1661)11月6日	〃 / 〃	151	〃 〃 亥 〃	〃 8年(1695) 〃	〃 / 〃
120	〃 寅 〃	〃 2年(1662)11月15日	〃 / 〃	152	〃 〃 子 〃	〃 9年(1696)11月	〃 / 〃
121	〃 卯 〃	〃 3年(1663)11月11日	〃 / 〃	153	〃 〃 丑 〃	〃 10年(1697) 〃	〃 / 〃
122	〃 辰 〃	〃 4年(1664)11月11日	〃 / 〃	154	〃 寅御年貢納割付之事	〃 11年(1698) 〃	〃 / 宝七郎左衛門(差出人)
123	〃 巳 〃	〃 5年(1665)11月3日	〃 / 機崎半次(差出人)	155	〃 卯御年貢割付事	〃 12年(1699)10月	〃 / 〃
124	当納下札之事	〃 6年(1666)11月21日	〃 / 竹内三郎左衛門(差出人)	156	〃 辰 〃	〃 13年(1700) 〃	〃 / 〃
125	当未之納下札之事	〃 7年(1667)11月15日	〃 / 〃	157	可納巳御年貢割付事	〃 14年(1701) 〃	〃 / 〃
126	〃 申 〃	〃 8年(1668)11月15日	〃 / 梅村市兵衛・板井才兵衛(差出人)	158	〃 午 〃	〃 15年(1702) 〃	〃 / 〃
127	当酉御年貢之事	〃 9年(1669)11月15日	〃 / 近藤助右衛門(差出人)	159	〃 未 〃	〃 16年(1703) 〃	〃 / 〃
				160	〃 申 〃	宝永元年(1704) 〃	〃 / 〃
128	〃 戌 〃	〃 10年(1670)10月27日	〃 / 近藤助右衛門留守居大島仁左衛門・高野平太夫(差出人)	161	〃 西 〃	〃 2年(1705) 〃	〃 / 〃
				162	〃 戌 〃	〃 3年(1706) 〃	〃 / 〃
				163	〃 亥 〃	〃 4年(1707) 〃	〃 / 〃
				164	〃 子 〃	〃 5年(1708) 〃	〃 / 〃
				165	〃 丑 〃	〃 6年(1709) 〃	〃 / 〃
129	可納亥之御年貢割付之事	〃 11年(1671)11月16日	〃 / 山田清左衛門(差出人)	166	〃 寅 〃	〃 7年(1710) 〃	〃 / 宝金右衛門・宝七郎左衛門(差出人)
130	〃 子 〃	〃 12年(1672)11月25日	〃 / 〃				〃 / 〃
131	〃 寅之御年貢米大豆之事	延宝2年(1674)12月9日	〃 / 山田清	167	〃 卯 〃	正徳元年(1711) 〃	〃 / 〃

	内 容	年 号	備 考		内 容	年 号	備 考
168	可納辰御年貢割付事	正徳2年(1712)12月	7巻所載	215	〈年貢皆済目録〉	〃 16年(1731) 〃	〃
169	巳 〃	〃 3年(1713)10月15日	〃	216	覚 〈年貢皆済目録〉	〃 17年(1732) 〃	〃
170	午 〃	〃 4年(1714) 〃	〃	217	〃 〈 〃 〉	〃 18年(1733) 〃	〃
171	未 〃	〃 5年(1715) 〃	〃	218	〃 〈 〃 〉	〃 20年(1735) 〃	〃
172	申 〃	享保元年(1716) 〃	〃	219	〃 〈 〃 〉	元文元年(1736) 〃	〃
173	子 〃	〃 5年(1720) 〃	〃	220	〃 〈 〃 〉	〃 2年(1737) 〃	〃
174	〈年貢割付状〉	〃 6年(1721) 〃	〃	221	〃 〈 〃 〉	〃 3年(1738) 〃	〃
175	〈 〃 〉	〃 7年(1722) 〃	〃	222	〃 〈 〃 〉	〃 4年(1739) 〃	〃
176	〈 〃 〉	〃 8年(1723) 〃	〃	223	〃 〈 〃 〉	〃 5年(1740) 〃	〃
177	辰割付之事	〃 9年(1724) 〃	〃	224	〃 〈 〃 〉	寛保元年(1741) 〃	〃
178	〈年貢割付状〉	〃 11年(1726) 〃	〃	225	〃 〈 〃 〉	〃 3年(1743) 〃	〃
179	未割付之事	〃 12年(1727) 〃	〃	226	〃 〈 〃 〉	延享元年(1744) 〃	〃
180	申 〃	〃 13年(1728) 〃	〃	227	〃 〈 〃 〉	〃 2年(1745) 〃	〃
181	酉 〃	〃 14年(1729) 〃	〃	228	卯割付之事	〃 4年(1747)10月18日	9巻所載
182	戌 〃	〃 15年(1730) 〃	〃	229	覚 〈年貢皆済目録〉	〃 4年(1747)12月	〃
183	亥 〃	〃 16年(1731) 〃	〃	230	辰割付之事	寛延元年(1748)10月18日	〃
184	子 〃	〃 17年(1732) 〃	〃	231	巳 〃	〃 2年(1749) 〃	〃
185	丑 〃	〃 18年(1733) 〃	〃	232	午 〃	〃 3年(1750) 〃	〃
186	寅 〃	〃 19年(1734) 〃	〃	233	未 〃	〃 4年(1751) 〃	〃
187	卯 〃	〃 20年(1735) 〃	〃	234	覚 〈年貢皆済目録〉	〃 4年(1751)7月	〃
188	辰 〃	元文元年(1736) 〃	〃	235	申割付之事	宝暦2年(1752)10月18日	〃
189	巳 〃	〃 2年(1737) 〃	〃	236	酉 〃	〃 3年(1753) 〃	〃
190	午 〃	〃 3年(1738) 〃	〃	237	戌 〃	〃 4年(1754) 〃	〃
191	未 〃	〃 4年(1739) 〃	〃	238	覚 〈年貢皆済目録〉	〃 3年(1753)7月	〃
192	申 〃	〃 5年(1740) 〃	〃	239	亥割付之事	〃 5年(1755)10月18日	〃
193	酉 〃	寛保元年(1741) 〃	〃	240	子 〃	〃 6年(1756) 〃	〃
194	戌 〃	〃 2年(1742) 〃	〃	241	丑 〃	〃 7年(1757) 〃	〃
195	亥 〃	〃 3年(1743) 〃	〃	242	寅 〃	〃 8年(1758) 〃	〃
196	子 〃	延享元年(1744) 〃	〃	243	卯 〃	〃 9年(1759) 〃	〃
197	丑 〃	〃 2年(1745) 〃	〃	244	辰 〃	〃 10年(1760) 〃	〃
198	寅 〃	〃 3年(1746) 〃	〃	245	巳 〃	〃 11年(1761) 〃	〃
199	辰御物成米銀受取之事	正徳2年(1712)12月	8巻所載	246	午 〃	〃 12年(1762) 〃	〃
200	巳御年貢米銀受取事	〃 3年(1713) 〃	〃	247	未 〃	〃 13年(1763) 〃	〃
201	午御物成米銀受取之事	〃 4年(1714) 〃	〃	248	申 〃	明和元年(1764) 〃	〃
202	未 〃	〃 5年(1715) 〃	〃	249	酉 〃	〃 2年(1765) 〃	〃
203	申 〃	享保元年(1716) 〃	〃	250	戌 〃	〃 3年(1766) 〃	〃
204	酉 〃	〃 2年(1717) 〃	〃	251	亥 〃	〃 4年(1767) 〃	〃
205	戌御物成請取之事	〃 3年(1718) 〃	〃	252	子 〃	〃 5年(1768) 〃	〃
206	亥 〃	〃 4年(1719) 〃	〃	254	寅 〃	〃 7年(1770) 〃	〃
207	子 〃	〃 5年(1720) 〃	〃	255	卯 〃	〃 8年(1771) 〃	〃
208	寅 〃	〃 7年(1722) 〃	〃	256	辰 〃	〃 9年(1772) 〃	〃
209	巳 〃	〃 10年(1725) 〃	〃	257	巳 〃	安永2年(1773) 〃	〃
210	覚 〈年貢皆済目録〉	〃 11年(1726) 〃	〃	258	午 〃	〃 3年(1774) 〃	〃
211	〃 〈 〃 〉	〃 12年(1727) 〃	〃	259	未 〃	〃 4年(1775) 〃	〃
212	〃 〈 〃 〉	〃 13年(1728) 〃	〃	260	申 〃	〃 5年(1776) 〃	〃
213	〃 〈 〃 〉	〃 14年(1729) 〃	〃	261	酉 〃	〃 6年(1777) 〃	〃
214	〃 〈 〃 〉	〃 14年(1730) 〃	〃	262	戌 〃	〃 7年(1778) 〃	〃

	内 容	年 号	備 考		内 容	年 号	備 考
263	亥 ”	安永 8 年(1779) ”	”	308	申 ”	” 8 年(1788) ”	”
264	子 ”	” 9 年(1780) ”	”	309	酉 ”	寛政元年(1789) ”	”
265	寛〈年貢皆済目録〉	宝暦 2 年(1752) 7 月	10 卷所載	310	戌 ”	” 2 年(1790) ”	”
266	” 〈 ” ” 〉	” 4 年(1754) ”	”	311	亥 ”	” 3 年(1791) ”	”
267	” 〈 ” ” 〉	” 5 年(1755) ”	”	312	子 ”	” 4 年(1792) ”	”
268	” 〈 ” ” 〉	” 6 年(1756) ”	”	313	丑 ”	” 5 年(1793) ”	”
269	” 〈 ” ” 〉	” 7 年(1757) ”	”	314	寅 ”	” 6 年(1794) ”	”
270	” 〈 ” ” 〉	” 8 年(1758) ”	”	315	卯 ”	” 7 年(1795) ”	”
271	” 〈 ” ” 〉	” 9 年(1759) ”	”	316	辰 ”	” 8 年(1796) ”	”
272	” 〈 ” ” 〉	” 10 年(1760) ”	”	317	巳 ”	” 9 年(1797) ”	”
273	” 〈 ” ” 〉	” 11 年(1761) ”	”	318	午 ”	” 10 年(1798) ”	”
274	” 〈 ” ” 〉	” 12 年(1762) ”	”	319	未 ”	” 11 年(1799) ”	”
275	” 〈 ” ” 〉	” 13 年(1763) ”	”	320	酉 ”	享和元年(1801) ”	”
276	” 〈 ” ” 〉	明和元年(1764) ”	”	321	戌 ”	” 2 年(1802) ”	”
277	” 〈 ” ” 〉	” 2 年(1765) ”	”	322	亥 ”	” 3 年(1803) ”	”
278	” 〈 ” ” 〉	” 3 年(1766) ”	”	323	子 ”	文化元年(1804) ”	”
279	” 〈 ” ” 〉	” 4 年(1767) ”	”	324	丑 ”	” 2 年(1805) ”	”
280	” 〈 ” ” 〉	” 5 年(1768) ”	”	325	寅 ”	” 3 年(1806) ”	”
281	” 〈 ” ” 〉	” 6 年(1769) ”	”	326	卯 ”	” 4 年(1807) ”	”
282	” 〈 ” ” 〉	” 7 年(1770) ”	”	327	辰 ”	” 5 年(1808) ”	”
283	” 〈 ” ” 〉	” 8 年(1771) ”	”	328	巳 ”	” 6 年(1809) ”	”
284	” 〈 ” ” 〉	” 9 年(1772) ”	”	329	午 ”	” 7 年(1810) ”	”
285	” 〈 ” ” 〉	安永 2 年(1773) ”	”	330	未 ”	” 8 年(1811) ”	”
286	” 〈 ” ” 〉	” 3 年(1774) ”	”	331	申 ”	” 9 年(1812) ”	”
287	” 〈 ” ” 〉	” 4 年(1775) ”	”	332	酉 ”	” 10 年(1813) ”	”
288	” 〈 ” ” 〉	” 5 年(1776) ”	”	333	戌 ”	” 11 年(1814) ”	”
289	” 〈 ” ” 〉	” 7 年(1778) ”	”	334	亥 ”	” 12 年(1815) ”	”
290	” 〈 ” ” 〉	” 8 年(1779) ”	”	335	子 ”	” 13 年(1816) ”	”
291	” 〈 ” ” 〉	” 9 年(1780) ”	”	336	丑 ”	” 14 年(1817) ”	”
292	” 〈 ” ” 〉	天明 2 年(1782) ”	”	337	寅 ”	文政元年(1818) ”	12 卷所載
293	” 〈 ” ” 〉	” 3 年(1783) ”	”	338	卯 ”	” 2 年(1819) ”	”
294	” 〈 ” ” 〉	” 4 年(1784) ”	”	339	辰 ”	” 3 年(1820) ”	”
295	” 〈年貢皆済状〉	” 5 年(1785) ”	”	340	巳 ”	” 4 年(1821) ”	”
296	” 〈 ” ” 〉	” 7 年(1787) ”	”	341	午 ”	” 5 年(1822) ”	”
297	” 〈 ” ” 〉	寛政元年(1790) ”	”	342	未 ”	” 6 年(1823) ”	”
298	” 〈 ” ” 〉	” 2 年(1791) ”	”	343	申 ”	” 7 年(1824) ”	”
299	” 〈 ” ” 〉	” 4 年(1792) ”	”	344	酉 ”	” 8 年(1825) ”	”
300	” 〈 ” ” 〉	” 5 年(1793) ”	”	345	戌 ”	” 9 年(1826) ”	”
301	丑割付之事	天明元年(1781)10月18日	11 卷所載 内 幕延岡藩領時代、以降同	346	亥 ”	” 10 年(1827) ”	”
				347	子 ”	” 11 年(1828) ”	”
				348	丑 ”	” 12 年(1829) ”	”
302	寅 ”	” 2 年(1782) ”	”	349	寅 ”	” 13 年(1830) ”	”
303	卯 ”	” 3 年(1783) ”	”	350	卯 ”	天保 2 年(1831) ”	”
304	辰 ”	” 4 年(1784) ”	”	351	辰 ”	” 3 年(1832) ”	”
305	巳 ”	” 5 年(1785) ”	”	352	巳 ”	” 4 年(1833) ”	13 卷所載
306	午 ”	” 6 年(1786) ”	”	353	午 ”	” 5 年(1834) ”	”
307	未 ”	” 7 年(1787) ”	”	354	未 ”	” 6 年(1835) ”	”

	内 容	年 号	備 考		内 容	年 号	備 考
355	申 ”	天保 7 年(1836) ”	”	374	卯 ”	安政 2 年(1855) ”	15 卷所載
356	酉 ”	” 8 年(1837) ”	”	375	辰 ”	” 3 年(1856) ”	”
357	戌 ”	” 9 年(1838) ”	”	376	巳 ”	” 4 年(1857) ”	”
358	亥 ”	” 10 年(1839) ”	”	377	午 ”	” 5 年(1858) ”	”
359	子 ”	” 11 年(1840) ”	”	378	未 ”	” 6 年(1859) ”	”
360	丑 ”	” 12 年(1841) ”	”	379	申 ”	万延元年(1860) ”	”
361	寅 ”	” 13 年(1842) ”	”	380	酉 ”	文久元年(1861) ”	”
362	卯 ”	” 14 年(1843) ”	”	381	戌 ”	” 2 年(1862) ”	”
363	辰 ”	” 15 年(1844) ”	”	382	亥 ”	” 3 年(1863) ”	”
364	巳 ”	弘化 2 年(1845) ”	14 卷所載	383	〈年貢割付状〉	慶応元年(1865) ”	16 卷所載
365	午 ”	” 3 年(1846) ”	”	384	寅割付之事	” 2 年(1866) ”	”
366	未 ”	” 4 年(1847) ”	”	385	〈年貢割付状〉	” 3 年(1867) ”	”
367	申 ”	嘉永元年(1848) ”	”	386	辰割付之事	明治元年(1868) ”	”
368	酉 ”	” 2 年(1849) ”	”	387	壬申仮免状		17 卷所載
369	戌 ”	” 3 年(1850) ”	”	388	壬申田税仮免状 (大分郡新貝村)		”
370	亥 ”	” 4 年(1851) ”	”	389	明治 6 年地租 (大三大区六小区新貝村)	明治 6 年(1873)11 月 30 日	” / 大分県 県令森下景 瑞(差出人)
371	子 ”	” 5 年(1852) ”	”				
372	丑 ”	” 6 年(1853) ”	”				
373	寅 ”	” 7 年(1854) ”	”				

府内古図の成立

研究ノート

1. はじめに

中世大友氏時代の府内町を描いた古図が、幕末または明治以降広く郷土史等に引用され、模写や印刷が行われている。しかし、その解説を見ても、この古図に全幅の信頼をおいていたわけではなく、多くの場合江戸時代に描かれたものとして参考程度にとどめるのが常であった。

しかし、渡辺澄夫氏はこの古地図に疑問を持ちながらも「天正十六年参宮帳」^①に、古図に記載された町名が出てくることから、全くの想像としての地図ではなく、確実な資料に基いて描かれた可能性を指摘した。^②

さらに、昭和62年発行の大分市史の編纂のための史料調査中に、現在までに知られている古図のなかで成立が最も古いと思われる古図を発見した。また、同時に明治期字図に見る地割が、古図ときわめて類似し、現存社寺との位置関係の比較においても、かなり信頼度の高いものである事を明らかにした。^③

2. 府内古図の種類

現在知られている古図は、市史編纂の資料調査で発見された古図以外は、江戸末に写された模写図であるが、その模写図は現在所在を確認しておらず、今回検討する古図は、その模写図を昭和期になって写し取った図および印刷に付された古図である。

昭和27年発行「大分県古地図目録」^④には、「大友時代府内図」として3点^⑤が記載されているが未確認である。また久多羅木儀一郎氏が上の原館址の報告^⑥のなかで2種の古図を引用しており、一つは大分市那賀(進治)氏所蔵にかかるもので、大正4年4月発行大分市史付図の原図とされており、後述の古図C類と思われるもの、他方は古国府利光氏所蔵の古図で、同じくA類に相当すると思われる地図である。いずれも未確認である。

以上のように未確認の古図も多いが、現在確認済みの古図からすれば、絵に大小はあるものの、その描かれた地図の範囲は同一である。その表現・記載事項に違いが認められ、大きく3種類に分けて考えることができる。^⑦

1) A類古図

- (1)昭和62年発行「大分市史」(中)所載“戦国時代府内絵図”
(2)昭和15年発行「大分県郷土史料集成(地誌篇)」所載“旧府内城下図(大友時代)”垣本言雄氏蔵原図
(3)昭和12年発行「大分市誌」所載“南蠻貿易時代之府内図”伊藤正男氏蔵原図
A類として以上3点をあげることができる。(1)は、市

史編纂の時発見された古図で、府内古図の原典または原典に近いと考えられるものである。虫食い等破損は認められるものの全体としてはさしつかえない。寺院はその境内をかこみ門のみを書き、神社は拝殿・本殿鳥居の書き方は画一的である。街路に面した町家と思われる部分は黄色でベタに着色するが、郊外の家屋は家の形を描き込んでいる。

前述のように、絵の情報・地図の範囲はB・C類と同じであるが、文字情報は少なく、全体に描き込みは丁寧であるが、画一化された描きかたをしている。

(2) (3)のうち、(2)は(1)をある程度忠実に写した様子がかがえるが、文字情報に欠落が見られたり、表現に違いが認められる。(3)は基本的には(1)と同じであるが、絵の表現方法が、(1)はもちろん(2)に比較してもやや雑になっている。文字情報は(2)より(1)に忠実である。いずれにしても(2) (3)は、(1)あるいはそれに近いものを原図として写図したものと考えられる。

2) B類古図

別府・日名子太郎氏旧蔵にかかるもので、高山英明氏が昭和6年に写した図もそれであると思われる。日名子太郎氏旧蔵古図は所在を確認していないが、写真で見るとかぎり^⑧、高山氏写図にある付箋はつけられていない。ただ昭和5年発行姉崎正治「切支丹伝道の興廢」に掲載された写真^⑨には、高山氏写図と同じ付箋がつけられている。

本類は、描れた範囲、文字情報はA類と類似するが、絵はきわめて粗雑であり、文字情報も漢字をカタカナで表現したり、発音は同じであるが別の漢字に置きかえてしまったもの(「魚ノ店→魚ノ棚」「善巧寺→善光寺」)がある。また若宮(若宮八幡宮)は、A類では、大臣塔(大臣塚)のすぐ右側(北側)に描かれていたのが、祐向寺左手(南西側)に描かれており、現在の若宮八幡宮に近い位置にかきかえられている。また大臣塔が大臣塚にかえられており、古図が発見されたとされる上ノ原あたりに「此辺屋形跡有之、スベテ上ノ原と云」という書き込みが加えられている。また、A類にはなかった「此辺慶長年間震災津浪にて沈没するもの多し」という文字が、大分川河は付近に書き込まれている。別府湾大分川河口にあったとされる瓜生島または沖ノ浜が、慶長元年7月12日の地震と大津波によって海没した事件をさしている。本図をA類系統の原図から写すにあたって、その時点での考証が書き加えられたものと思われる。古図には、すでにA類から、瓜生島にあった町を移したとされる新町、裏町、本町が春日神社付近に描かれており、さらに後述のC類には、蛭子社、沖の浜、春岡寺が書き加えられている。

さて本図には、本図の原図となった古図の由来と写図の年代が書かれている。

「右豊後府内大友氏時代古図

天保五甲午季秋廿四借萱嶋

良敬蔵寫畢 大西村寓居

樊溪

良敬云此圖上ノ原ト申所寶戒寺近所ノ

農家ヨリ出シヲ府内町人寫シ置ヲ傳寫

スル由

申午季冬以樊溪先生本寫畢 後藤碩田

癸卯三月以萩原園田氏本校訂加移云云」

とあり、日名子太郎氏の古図は、萱嶋良敬が府内町人の持っていた写しを(元図は上ノ原の農家より出たという)写した図を、大西村樊溪が、天保5年9月24日に借受けて写した図をさらに、同年12月に後藤碩田が写し、さらに天保14^年3月に萩原園田氏本をもって校訂加彩した図ということになる。本図の元になった図は、上ノ原宝戒寺付近の農家より出た図ということになるが、いつ頃書かれたものか、いつ頃発見されたものか、また府内町人がいつ頃写したものか不明であり、本図の成立は天保5年以前である事が確認できるのみである。また天保14年に校訂・加彩するにあたって参考にした萩原園田氏本がどのような図であるのかも不明であるが、後藤碩田が写した樊溪本は、彩色がなかったのであろうか。

3) C類古図

本類には、大正4年発行「大分市史」に掲載された“旧府内城下図”^⑩と、昭和15年の高山英明氏の写図が知られている。

高山英明氏写図には「此原本ハ當御本丸ニ有之、元府内之図」「文政十二己丑年 皐月吉辰 牧在氏寫焉」とあり、筆をかえて「府内藩士族 渡辺瀧右衛門方蔵」「昭和十五年四月中浣 春浦高山英明寫」という書き込みがある。したがって、御本丸にあった図を文政12年五月に牧在氏が写した図を持っていた府内藩士族渡辺瀧右衛門氏より高山英明氏が借用して写した図ということになり、本図の成立は一応文政12年以前ということになる。

C類は、A・B類に比較して絵・文字とも情報量が多く、かなり後世の註釈的記述も多い。本類のA・B類との一番の違いは、椎迫(堀切峠)への道と、上ノ原への道(本城道)が描かれている点と、慶長元年の地震・津波で沈んだとされる瓜生島または、沖ノ浜にあって没後移された町・墓・神社が、A・B類以上に書込まれている点にある^⑪。本図は、若宮八幡社の位置・大臣塚などの情報の変化からすれば、A類から直接C類の変化は考え難く、B類古図をさらに考証を加えて詳細に描いた古図とすることができる。

3. 府内古図の成立年代

以上A～C類の三種に分類した古図は、その絵・文字情報などから、A→B→C類と変化したものと考えることが可能であり、C類は写す過程において考証が加えられ、写図当時の情報をも描き加えていった結果の図であると思われる。

さて、これら古図がいつ頃作成されたものであるかについては、古図のなかで一番古いと思われるA類古図に紀年は入っておらず、確実なところは不明であるといわざるを得ない。しかし、既述のように、B類、C類にはそれを写した年代の書き込まれた古図がある。B類は、天保5年(1834)、C類が、文政12年(1829)となっており、いずれも19世紀前半代である。したがって、19世紀前半代までには、府内古図なるものが知られていた事がわかる。

古図の描かれている内容の信憑性については、渡辺澄夫氏や大分市史によって触れられているので本稿では触れないが、古図を疑問視する立場でも、ある程度信憑性を認める立場でも、大友氏滅亡後江戸時代に描かれたものであるという点に関しては一致している。^⑫

1) 江戸時代発行地誌類に見られる府内古図

この古図の成立年代をさぐするために古図が江戸時代成立書にどのように引用されているかを検討してみると、表①の様に幕末に至るまでその引用が見られない。

貝原益軒は、元禄7年に豊後地方の史跡調査を長期にわたって行っているが、その折の紀行文「豊国紀行」には、一切引用はない。大友氏に関しては関心を持っており「大友の城跡は、是より半里南、上の原と云所なり。是元の府内なり。今は荒野となる。大友左近将監能直、初て爰に築かれしと云。其後大友氏代々の城地なり。」と記述しており、大友氏居館については正確に情報を得ているが、東新町から元町にかけての古図に描かれた町についての情報はつかんでいないようである。ただ、旧万寿寺の位置を「上の原に萬寿寺有。」としている事からすれば、上の原を広く解釈していたと考えられない事もない。

唐橋世済は豊後国中川藩の学者で、「豊後国志」を著しているが、やはり引用はない。記述としては「府内街 旧在古国府之地。其来尚矣。大友氏受封。累世居于此。比屋鱗次。商賈輻湊。最爲繁富。天正兵火之後。早川長敏再修之。(下略)」「府内城 在笠和郷府内。即府中。旧国府所在。今之城地。慶長二年所移。故呼其旧地。日古国府。乃任国司所居也。建久以還大友氏就之宮館。世居焉。称日屋形。又曰大友殿。建武以降干戈頻動。因更宮城郭以居焉。文禄二年。大友義統国除。三年。豊臣関白以城地賜早川主馬首長敏。兵燹之後。居民一掃。無所歸依。長敏令錢穀賑之。寺社街市。始復其旧。慶長二年。又使長敏移封于速見木付。

(下略)」とあり、やはり東新町から元町にかけては視野の内にない。

文化7年 伊能忠敬の調査の折にも、幕府の仕事としての調査であり、各種情報を集めていたと思われるが、古図の情報はつかんでいないようである。

文政9年に「太宰管内志」編纂のため豊後国に史料探訪に訪れた伊藤常足も、古図の情報は得ていないらしく、天保12年に著わされた「太宰管内志」に引用は全く見られない⁹⁰。「国府（前略）或書に大分郡荏隈郷古国府村、是国府之旧跡也、王制廢後、大友氏爲此国守護職、廢国府爲館、元弘已後、以館上野原、号之爲府内城、国府之旧地與上野原之間三町許、上野原在国府南とあり」「府内（前略）府内に新城古城とて兩處あり今の府内は新城なり、古の府内は、則上ノ原城を云、此城今はなし（下略）」とあり、本書もまた東新町から元町にかけての街についてはふれていない。

以上検討した書冊は、何れも上ノ原の大友氏の居館や、古国府については触れているが東新町から元町にかけての街に言及しておらず、単に言及しなかっただけでなく、古図なるものを見ていなかったと思われる。また、調査の行われた年代が、現在までに知られている古図のもっとも古い紀年である文政12年以前であることに興味が引かれ、古図の成立年代（または世に出た年代）が、文政12年をそんなに大幅にさかのぼるものでない事を示しているのかもしれない。

さて、府内古図の引用が認められるのは、安部淡斎⁹¹の著したとされる「雉城雑誌」に「雑誌曰」として引用されている「豊府雑誌」に唯一「旧府ノ図」として引用されているにすぎない。「豊府雑誌」は、成書として現存せずその成立年代も不明されており、「雉城雑誌」⁹²に引用されているのみである。「大分県郷土史料集成」編者の垣本言雄氏は、「豊府雑誌」と「雉城雑誌」について、「本書引用書中、豊府雑誌の如きも、既に同人⁹³の手によって集録されありしものなるべく、而して淡斎は、明治初年に、時の参事森下氏のために地方の沿革旧跡の来歴を調査した事もあり、此時右豊府雑誌を基とし、先に述べた諸書を併せて資料として、以て本書を編輯したものと思はれる。」として、豊府雑誌については淡斎の父六郎衛正名が編集した可能性を示し、雉城雑誌については淡斎が明治初年に編集したものであるとしている。したがって府内藩士安部正名、淡斎父子は、府内古図を実際に見てそれぞれの著作を編集したということになる。

明治以降になると、府内古図の引用は周知の事実として行われるようになる。後藤碩田は、B類古図を写しているが、明治7年の記事の載っている碩田叢士の「豊後国風俗話」のなかで“天正年中府内の古図”として引用しており、府内古図を天正年間の様子を描い

た古図であると考えていたことがわかる。

以上見てきたように、地誌類では幕末にいたるまで古図の引用はなかった事になる。

江戸時代には、現在の府内城及び府内城下町図は多数残されているが、上の原の丘陵まで含めて描かれている図は多くない。しかし、その図にも、府内古図に描かれた街の情報や上の原の大友氏居館跡を古跡として記入したものを見ていない。

木版画10枚一組の卷子状刷物である「(仮)別府湾鳥瞰図」は、杵築城から府内城下までの別府湾岸の風景を描いている⁹⁴。府内城下部分は、上野原の丘陵まで描かれ丘陵上も含めての社寺・旧跡が表示されている。その中で注目されるのは、府内古図に描かれた大友館の位置付近に、“大友屋舗跡”と表示されている点である。若干古図とは位置がずれているものの、現在の東新町から顕徳町にかけての位置に表示されていることは、古図からかまたは、そういった伝承を情報入手して表示したものであろう。府内古図がこの鳥瞰図を描く時に情報として使用されたと直接結びつけることは出来ないにしても、府内古図の成立を考える上で重要な参考にはなると思われる。ちなみに大友館を大友御屋舗と表示しているのはB類古図だけである。さてこの鳥瞰図の製作年代であるが、紀年がなく確定はできないが、絵図に書き込まれている古歌や、版画の状況などから、化政期（1804～1829）頃のものとして推定されており、古く見ても寛政期（1789～1800）のものと見られている。化政期のものとする、丁度古図に見られる紀年で古い方の文政12年に近い、若干さかのぼるものである。

2) 府内古図成立年代の考証

以上見てきたように、古図で紀年で古い図は文政12年であるが、幕末にいたるまで地誌類にその引用はなく、その観点からの府内古図の成立に関する資料は得られなかった。

しかし、幕末になって最初に引用した豊府雑誌を中心に編集した「雉城雑誌」に、府内古図の成立に関する考証が載っている。この部分は他書の引用ではなく、編者と考えられる安部淡斎の考えを述べた部分であり、以下その部分を引用すると、

「此図ハ旧府ノ時ヨリ有り来ル物ニ非ザル訳ハ、此図中、堀切峠ヲ載セズ（“大分川の流”には、“載ス”とあり、誤植と思われる）。此峠ハ、慶長十六年、竹中重隆在封ノ日、新府ノ爲ニ開ク処也。然ラバ、慶長以後ニ作爲スル所ノ、図ナル事明ケシ。且官庫ニ前代ヨリ収ル所ノ、此図一枚、前年一閱スル事ヲ得タリ。其筆ハ、前田等修ノ画ク処ニ似タリ。等修ハ日根野氏ノ画工ニシテ、月俸ヲ賜テ、当府米屋町ニ住ス。今稀ニ、其遺画存在ス。抑、日根野氏、當地在封日淺シト

雖、絶タルヲ継ギ、廃レタルヲ與ス。文武兼備ノ賢主ニシテ、当府社及び四民其仁恵、今ニ蒙ル事許多ナリ。殊ニ好古ノ君ニシテ、大友氏ノ代ノ全盛ヲモ偲ビ玉フ物カラ、其比ノ遺老ニ仰セテ、旧府ノ図ヲモ書シメ玉ヒシナルベシ。正正ノ始ヨリ寛永ノ中比迄ハ、棧ニ六十年程ナリ。」とあり、府内古図の時代考証をしたものとして一番古いものとなる。この中で、編者が“官庫ニ前代ヨリ収ル所ノ、此図一枚”とある部分は、時代の状況を考えれば、廃藩置県で府内藩が廃止され府内城内に県庁が置れ、その県庁の庫に、前代即ち藩政時代から収められていた古図と解釈でき、とすればこの文章は、明治初期に書かれた事になり、雉城雑誌が明治初期に編集された事を裏づけることになる。

さて、安部が見たという古図は堀切峠へ通じる道が描かれていたということからすればC類古図だけということになり、高山氏が写したC類古図に“此原本ハ当御本丸ニ有之”と書かれていることよりすれば、この原本そのものであった可能性が高い。

安部は、慶長16年に開刷された堀切峠に通じる道が描かれており、旧府（大友時代）に描かれた図ではなく、それ以降の図であり、絵の筆法からすると、日根野氏の絵師前田等修の絵に類似しており、日根野氏は好古の君で古えを貴び大友時代を偲んで前田等修に絵図を書かせたものであろうと考えているわけである。ただ、安部の見た古図はC類古図であると思われ、もし、そうだとすれば、日根野時代にまでさかのぼる古図とは、考えられず、絵の筆法からする推定に疑問が生じてくる。

また明治以降、府内古図を引用・解説するなかで、“後世拠るべき資料によって作成されたもの”と推定する根拠として、さらに大臣塚の記載が取りあげられている。大臣塚は、寛永12年（1633）に古墳上の大松が倒れ、石棺と人骨が露出したことから、時の府内藩主日根野吉明が、万寿寺関わる伝説をもとに寛永13年（1634）に大臣塚の石碑を建てたことから、この古墳が大臣塚と呼ばれるようになったもので、府内古図もそれ以降に書かれた事になるわけである。これは、先の安部の日根野吉明が絵師前田等修に書かせたものであるという考え方と矛盾せず、かえって大臣塚の石碑を建立した事は、好古の君を立証する証拠となっている。

日根野時代は1634～1657年の間で、1602年旧府内町を現在の府内に移転してから31～55年程しか経過していない事になり、旧府内町を記憶している住民は多数生存していた時代でもある。

以上の事よりすれば、府内古図の成立は、寛永13年（1634）以降、文政12年（1829）以前の間のいつかという事になるが、その間195年の差があり、とても成立年代を推定したとはいえない。

3) 博多古図の場合

中世の古図とされていた地図が、実は江戸時代に作成されたものであるという事例は幾例か存在するが、そのうち「博多古図」の例について見てみたい。

博多古図は大友探題館などが描かれ、府内にとっても重要な古図である。また貿易港として袖の湊や息ノ浜が見え、中世の博多を示す古図であると考えられてきたわけであるが、中山平次郎氏の研究⁹⁵によって、宝永7年（1710）から明和2年（1765）の間に作成されたものであると推定されている。それは、古図に記載された絵の情報が、宝永元年（1704）に成立した貝原益軒「筑前国統風土記」の記載を種本として利用しており、実際「筑前国風土記」には、博多古図の引用はなく、その後成立した「石城志」明和2年（1765）、や「太宰管内志」天保12年（1841）には引用されている。

博多では、「筑前国統風土記」が江戸における地誌類の編纂のはしりともいえ、その後各種の地誌類が編纂され、そのような状況、しいて言えば郷土意識のたかまりのなかで博多古図が新に作成されたものであると推定することができる。

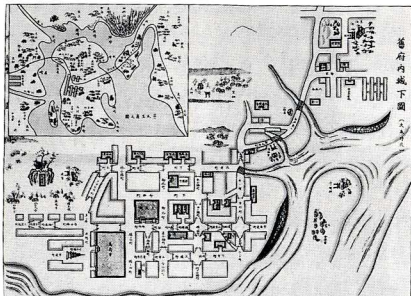
ふり返って、府内の状況を見れば、元禄の頃の貝原益軒の調査や、「豊府聞書」をはしりとして、文化年間以降、「豊後国志」、伊能忠敬・伊藤常足等の調査や、後藤碩田（文化2年生れ）、安部淡斎（文化10年生れ）など、文化的・郷土誌的関心が高まり、それを受け継ぐ人物が生まれるなどしている時代がある。また先に触れた「別府湾鳥瞰図」も化政期に発行されたものらしいと考えられ、その状況の一端を示している可能性がある。また、紀年の入った古図が、文政12年が一番古い事からしても、また博多古図製作状況を府内にも適用できるとすれば、府内古図の作成が、化政期または、それ以前にさかのぼっても、それほど古くはないだろうと推定する事が可能であると考えられる。

4. おわりに

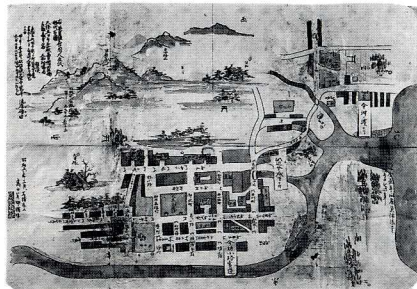
以上述べてきた事は、状況証拠だけをならべてきただけにすぎず、結論には当然ながら達することはできなかった。検討した古図も写図紀年の入ったものは、現代の写図であり、一番古いと考えられるA類古図には書かれたと年号はもちろん、写図年代さえ書かれていないもので、述べてきた状況証拠のなかに埋没してしまった感があり、現在私が考えている時代よりさらにさかのぼる可能性は否定できない。結論的には、正しい作成年号の入った府内古図の出現をまつ以外ないといえる。

しかし、最初に述べたように、府内古図の内容自体は、作成年代の新古にかかわらず、かなり正確な情報を示していると考えられており、別稿において府内の町の復元的想像を示してみたい。

- 註1.「天正十六年参宮帳」大分県史料25、302～335頁、大分。
 註2. 渡辺澄夫、1974「古代・中世の大分」大分県地方史73、21～49頁、大分。渡辺澄夫、1982「豊後国府と守護所」『増訂 豊後大友氏の研究』142～182頁、東京。
 註3. 昭和62年発行『大分市史』中巻、巻頭写真付図。
 註4. 大分大学歴史研究会・大分史談会、1952『大分県古地図目録』大分県教育委員会。
 註5. (1)立川輝信蔵、105×125、5色。府内市街図最古のものの一つ。だいうす堂、万寿寺、神宮寺等の社寺、大友屋敷等記入。原図上野松坂氏蔵、現在亡失。「古国府社家山崎氏より借用写之」とあり。(2)佐藤信一蔵、119×111、8色。立川氏蔵写図と対比される古図。原図は那賀氏蔵なるも焼失。(3)佐藤信一蔵、80×136、8色。
 註6. 久多羅木儀一郎、1925「上の原館址」史蹟名勝天然記念物調査報告4、1～24頁、大分。
 註7. 昭和15年発行「大分県郷土史料集成 地誌篇」で、編集者垣本言雄は、付図として載せた「旧府内城下図(大友時代)」(原図編者蔵・A類古図)の解説中、古図に二種あり、付図がいささか古く、大正4年発行大分市史付図(C類古図)がやや新しいという事を指摘している。
 註8. 村上直次郎記、1969「イエス会士日本通信(下)」新異国叢書2、所載写真。
 註9. 写真の古図は、筆跡は、日名子、高山古図と異なる。東大史料編纂所蔵写本か？
 註10.「癸卯三月」は、天保5年以降では、天保14年が一番近い年号である。
 註11. 久多羅木儀一郎氏によれば、市史付図は、那賀進治氏蔵の古図が原図であるとしている。
 註12. 高山氏写図には、春日神社付近の部分だけを描いた図が別に貼付されており、その図は、A類古図(一部B類古図に似るところがある)に類似している。高山氏が写した元図にこのような貼付があったのか、高山氏が独自に貼付したのかは不明。
 註13. ただ、昭和62年発行大分市史で、狭間久氏が、C類古図の成立を永禄9年(1566)としているが、「但文政十二乙丑年迄年数二百六十五年ニ成ル」という書き込みの解釈の誤りによるものと思われる。
 註14. 本書では、豊後国の府内古図については引用はないが、筑前国では「博多古図」がさかんに引用されている。博多古図については後で言及する。
 註15. 安部淡斎、文化10年(1813)～明治13(1880)、家世々府内藩に仕える。遊馬館教師、医学校長。
 註16. 雉城雑誌は、碩田叢史本に「大分川の流れ」として写しが残っている。字句は、「大分県郷土史料集成 地誌篇」に採録されている「雉城雑誌」と同じであるが、後者には誤植が認められる。
 註17. 安部淡斎の父、六郎兵衛正名のことと思われる。殊に国学に長じ、地方の沿革に精通していたといわれる。
 註18. 作者として、府内の仙寿堂、芦川と書かれており、発行元は地元府内内であると思われる。天保6年紀年の入った画像に「画工 千寿堂」とあるものがあり、同一人物であると思われる。
 註19. 中山平次郎、1984『古代乃博多』福岡。



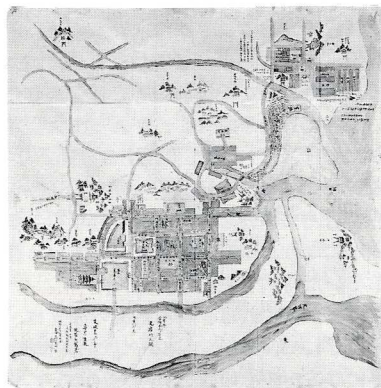
(1) A類古図(大分県郷土史料集成(地誌篇)所載)



(2) B類古図(高山虔三氏蔵)

府内古図関連表

1574 (天正2)	白杵悪六(白杵越中守鑑速) 没。
1586 (天正14)	仙石橋をかける
1593 (文禄2)	大友義統除国
1596 (慶長1)	大地震・大津波おこる。(瓜生島または沖の浜海没)
1599 (慶長4)	府内城三階城楼なる。大友屋形より移す。
1602 (慶長7)	天守閣外完成。旧府内城下町を移る。
1611 (慶長16)	堀切峠を開く。
1631 (寛永8)	萬寿寺移転。
1633 (寛永12)	大松倒れ人骨露出。
1634 (寛永12)	日根野吉明大塚石碑を建てる。(百合若大塚)
1645 (正保2)	蓬萊山を築き直す。
1634～1657	日根野氏畫工・前田等修(米屋町居住)
1694 (元禄7)	貝原益軒豊前豊後地方史蹟(20日間)『豊後紀行』(引用無し)
1698 (元禄11)	戸倉貞則『豊府聞書』(引用無し)
1710～66頃	博多古図2種類作られる。
1783 (天明3)	古川古松軒『西遊雜記』(引用無し)
1804 (文化1)	唐橋世濟『豊後国誌』(引用無し)
1805 (文化2)	後藤碩田誕生
1810 (文化7)	伊能忠敬測量のための滞在(約8日間)(見聞せず)
1813 (文化10)	安部淡斎誕生
文化文政年間?	「別府湾島嶼図」(「大友屋鋪跡」表示あり)
1826 (文政9)	伊藤常足豊後国廻国史料採訪(見聞せず)
1829 (文政12)	“比原本・当御本丸・有之「元府内之図」”文政12年牧在氏写。C類古図
1834 (天保5)	「豊後府内大友氏時代古図」(上の原と申す所宝戒寺近所の農家より出府内町人写し置きを転写)。B類古図
1838 (天保9)	『豊府指南』(引用無し)
1838 (天保12)	『太宰管内志』(引用無し)
幕末～明治	安部淡斎『雉城雑誌』引用の「豊府雑誌」に旧府内図引用あり
1880 (明治13)	安部淡斎死去(63歳)
1882 (明治15)	後藤碩田死去(77歳)



(3) C類古図(高山虔三氏蔵)

教育普及活動

ふるさとの歴史講座

昨年度同様、考古、歴史、古文書の3コースを開講した。各コースともに期間は3ヵ月、第2～4土曜日の計9回の講座を無料で開講。対象は高校生以上とし、定員は、考古・歴史が70名、古文書が40名とした。講師および講義内容の詳細は以下のとおりである。

(1) 考古のコース

期 間	4月～6月
時 間	14時～15時30分
講 師	橋 昌信氏(別府大学文学部教授)
	菊田 徹氏(大分県教育庁文化課主査)
	宮内克己氏(主査)
	玉永光洋氏(主査)
	高橋 徹氏(主査)
	吉田 寛氏(主事)
	佐伯 治氏(竹田市文化財課主任)
	木村幾多郎(当 館)

実施日と内容

実施日	内 容	講 師
4月		
11日	旧石器・縄文時代概論	橋 昌信 氏
18日	弥生時代・ウソ? ホント?	木村幾多郎
25日	墳墓と葬送	玉永光洋 氏
5月		
9日	土偶について	宮内克己 氏
16日	弥生の絵について	玉永光洋 氏
23日	埴輪について	高橋 徹 氏
6月		
13日	岡城について	佐伯 治 氏
20日	臼杵城について	菊田 徹 氏
27日	府内城三ノ丸遺跡調査概要	吉田 寛 氏

のべ受講者数 510人

(2) 歴史のコース

期 間	7月～9月
日 時	14時～15時30分
講 師	豊田寛三氏(大分大学教育学部教授)
	松本 正氏(助教授)
	飯沼賢司氏(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館主任研究員)
	佐藤晃洋氏(大分県教育庁文化課先哲叢書

編纂班指導主事)

三重野誠氏(大分県教育庁文化課先哲叢書編纂班指導主事)

武富雅宣(当 館)

長田弘通(当 館)

実施日	内 容	講 師
7月		
4日	作原八幡宮の「浜ノ市」について	武富雅宣
11日	国絵図について	長田弘通
18日	幕府と大名	豊田寛三 氏
8月		
15日	田能村竹田—文化竹田の誕生—	佐藤晃洋 氏
22日	5周年記念特別展「覇権をめざした英雄たち—大友宗麟とその時代」(特別展事前紹介)	長田弘通
29日	滝廉太郎について	松本 正 氏
9月		
12日	作原八幡宮と大友氏	武富雅宣
19日	大友氏と宇佐宮	飯沼賢司 氏
26日	大友宗麟について—対宇佐八幡との関係—	三重野誠 氏

のべ受講者数 587人

実施日と内容

(3) 古文書のコース

期 間	10月～12月
時 間	14時～15時30分
講 師	武富雅宣(当 館)
	長田弘通(当 館)

実施日	内 容	講 師
11月		
14日	大友吉統重物譲状(大友文書)・豊臣秀吉高麗陣定(立花家文書)	武富雅宣
21日	大友宗麟書状2通(島井文書)	武富雅宣
28日	〃	武富雅宣
12月		
12日	浦方高札(新貝村牧家文書)	長田弘通
19日	〃	長田弘通
26日	〃	長田弘通
1月		
9日	五人組帳前書(新貝村牧家文書)	武富雅宣
23日	〃	武富雅宣
30日	〃	武富雅宣

のべ受講者数 461人

資料収集

寄贈

考古資料

○弥生式土器 1点

田中大蔵氏

歴史資料

○豊後府内領絵図 1点

正 隆子氏

縦39.5×横79.0cm。明治2年2月調。府内藩領全域を描いた図。村名を小判型の楕円内に書き込み、藩領分知領・幕府領・他藩領の区別をする。また、街道を朱線、郡界を黒線で示す。この他、寺社を○印で表わしている。縮尺は「以壹里、積三寸」との注記がある。さらに、分間方として15人の名前が書き込まれており、簡単な測量を行なったようだ。作成目的はまだ明らかにしていないが、絵図が作られた明治2年2月30日に、府内藩は版籍奉還を願い出ており、その関係書類として作成されたのかもしれない。

○第14回九州沖縄八県連合共進会絵はがき 8点

吉井 顕氏

大正10年3月から大分市で開催された「第14回九州沖縄八県連合共進会」の記念絵はがき。いずれも、第1会場にあてられた大分県庁舎と新川に作られた第2会場の各施設の写真が印刷されている。大分県が発行した「記念写真集」とともに共進会の様子を具体的に知ることができる資料である。

○山河通けき揮毫集 12巻

玉井 実氏

○古代～近代古銭コレクション 180点 橋詰武彦氏

長年貨幣史研究を続けておられる橋詰氏の膨大な古銭コレクションの一部。古代中国の銅銭を初め、奈良時代の和同開珎から昭和初期までの日本の代表的貨幣で構成されており、貨幣の歴史が通観できる資料。

民俗資料

○脱穀機 1点

寺司昭男氏

○打ち引き鋤 2点

下川庄平氏

○蓄音機、SPレコード 3 以上4点

杉田 満氏

○長持、箱膳 以上2点

橋本欣一氏

○鞍2、モウガ、コガラ、千歯扱き2、
田植え綱、田の草取り 鋤、藁敲き、以上10点

松本昭義氏

寄託

歴史資料

○府内藩校遊焉館絵図 1点

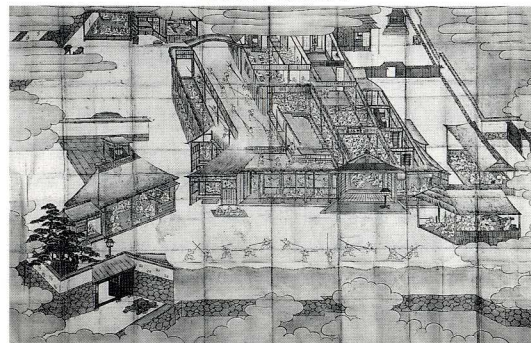
弥栄神社

府内藩校遊焉館での文武両立の学習の様子を描いた絵図。全国的にも大変めずらしい資料である。遊焉館は地震で倒壊した采芹堂が安政3年(1856)に北の丸藩主邸宅を改築して移転した事に始まる。その後、慶応元年(1865)に中島に新築移転している。本図は、門構えの位置、図下部と右側が堀に面している立地条件から、北の丸時代の遊焉館と考えられる。

大分市指定有形文化財



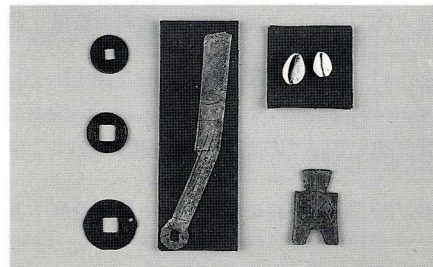
豊後府内領絵図



府内藩校遊焉館絵図



九州沖縄八県連合共進会絵はがき



古銭コレクション

購入

歴史資料

○大友義統書状 1通 戦国時代 28.3×39.9cm
6月12日付け 税所越中守宛

大友義統が税所氏に、府内の屋敷地と祇園社領を安堵し、あわせて府内町人から「屋敷料」を徴収することを認めた文書。これまで、「日野幸顕文書」として東大史料編纂所の影写本で知られていたが、原本所在不明の史料であった。

○『日本の花束』 1冊 380p 1650年
リスボン刊 スペイン語 18.4×14.2cm

ポルトガル人イエズス会宣教師アントニオ・カルディム著。全3編からなり、日本の殉教者と日本人宣教師を花にたとえて紹介し、大友宗麟などキリシタン大名の略伝を述べる。また、殉教者の肖像画や処刑図、日本国内の教会所在地を示す地図が挿入されている。

○『天正少年遣欧使節記』 1冊 477p 1593年
インゴルシュタット刊 ドイツ語 16.9×9.9cm

1585年ローマで出版された「天正少年遣欧使節記」のドイツ語翻訳改訂版と日本から発信された宣教師書簡集で構成されている。特に、帰国後の少年使節の動向を伝えており、貴重である。

○『航海探検廻国記』 1冊 326p 1653年
ロンドン刊 英語 27.7×19.4cm

ポルトガル人メーデス・ピントがアフリカ・インド・東南アジア・日本を約20年遍歴し、帰国後著した旅行記。日本を4度訪れており、5分の1を日本関係の記述に充てている。

○『イエズス会宣教師書簡集』 1冊 472p 1574年
ケルン刊 ラテン語 18.0×12.3cm

イエズス会宣教師で歴史家のイタリア人ジョバンニ・マッフェイが編集した、1550～60年代にゴア・マニラ・日本在住のイエズス会宣教師が発信した書簡集。豊後からの書簡が10通含まれている。また、大友宗麟の弟で、大内氏の家督を継いだ義長(晴英)が1552年に教会建立を許可した書状の写しが掲載されている。

○日出城下町絵図 1鋪 江戸時代 195×221cm

日出城下町全体と近郊を描く。武家屋敷群は区画表示され、居住者の名前が書き込まれている。地元に残る同様の絵図と比較して、たいへん豊富な内容に富む資料である。

○大分町地図・同下図 2鋪 明治40年代
紙本手彩 94.7×103.7cm

大分町・西大分町・荏隈村・豊府村が合併し新大分町が誕生した明治40年から、市制が施行される明治44年までの地図。手書手彩で、大字ごとに色分けし、官庁・学校などが記号で示される。新大分町の地図としては唯一の資料であろう。

○『大化帖』 1冊 明治44年 37.9×22.8cm

乙津出身で江戸時代末の学者後藤碩田が豊後国内に点在する文化財の模写図をまとめた書物。なかには、現在所在不明となっているものもあり、実測をとまった正確な記録は失われた文化財を知り得る貴重な文献となっている。原本は天保15年に書かれたが、本書は明治44年に出版されたものである。

○大正初期大分写真帖 1冊 明治末～大正初期
写真60点貼り 13.0×18.6cm

明治末～大正初期に撮影されたモノクロ写真をアルバムに張り付けたもの。建設途中の大分駅や別府駅、田の浦付近の日豊線と別大道路などの写真がある。

○神宮豊後大分教会図 1枚 明治時代
銅版着色 35.8×47.0cm

明治時代鶴崎町にあった神社「豊後教会所」の建物と境内を描いた銅版画。

○大分県・大分市地図 8枚 明治～昭和時代

①大分県地形図 明治22年 46.0×58.2cm

②大分県地図 大正14年 53.5×38.7cm

③日本交通分県地図 大分県 大正14年 54.9×75.1cm

④大分県地図 昭和5年 53.0×39.0cm

⑤大分県勢要覧 昭和11年 54.4×75.0cm

⑥大分市街新地図 大正6年 53.5×39.5cm

⑦大分市案内 大正10年 18.7×12.5cm

⑧大分市街地図 戦後 53.0×75.9cm

明治～昭和前期に市販されていた大分県と大分市の地図。時代順に並べると町が次第に近代化されていく様子がよくわかる。また、裏面に名所旧跡案内や商店街の広告が印刷されている地図もある。

美工資料

○鮫皮貼螺鈿洋櫃 1合 桃山時代
横26.7×幅13.4×高16.2cm

蓋と身の表面に鮫皮を貼り、その周囲に螺鈿と金蒔絵を施している。

○南蛮人図鏡 1面 桃山時代 径 7.6cm

懐中用丸鏡の表面に、帽子を片手に持つ南蛮人と桜の花を図柄としてあしらっている。

○南蛮兜 2頭 桃山時代 鉢高21.8・20.5cm

鉄地を左右に張り合わせ、鉢形を桃や椎の実の形に作り、中央に一条の筋を立てるなど南蛮兜の特徴をよく示している。1頭は立て筋に金象嵌、前つばに唐草文の彫金を施し、もう1頭は鉄地に漆を塗り、全体に金箔を押している。

○クルス紋入染付皿 1枚 江戸時代 径16.7cm

江戸時代中期～後期に肥前伊万里で生産された染付の皿。内面は菊と梅図であるが、中央上部にクルス文がある。

○児島高德騎馬図 1幅 松平近儔作 江戸時代後期

絹本着色 91.8×38.5cm

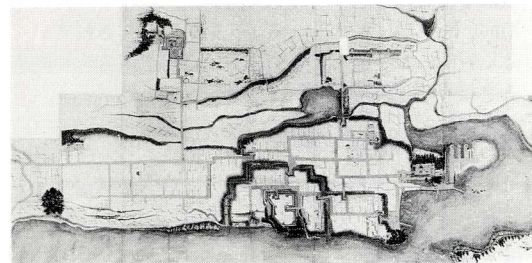
府内藩6代藩主松平近衛の作。図柄は南北朝時代、南朝の忠臣児島高德が醍醐天皇への忠義心を示すため、桜の木に「天莫空勾踐……」との漢詩を刻んだという故事を描く。

○桜楓山水図蒔絵印籠 1合 梶川作 江戸時代
松平大給氏家紋入り根付け付 9.5×4.5cm

府内藩の藩政改革に活躍した家老岡本主米が藩主から拝領した印籠。表裏に桜と楓が咲き誇る川辺の景色が蒔絵されており、藩主松平氏の家紋が金象嵌された象牙の根付けがついている。なお、「梶川作」の銘と壺形印がある。



大友義統書状



日出城下町絵図



大正初期大分写真帖

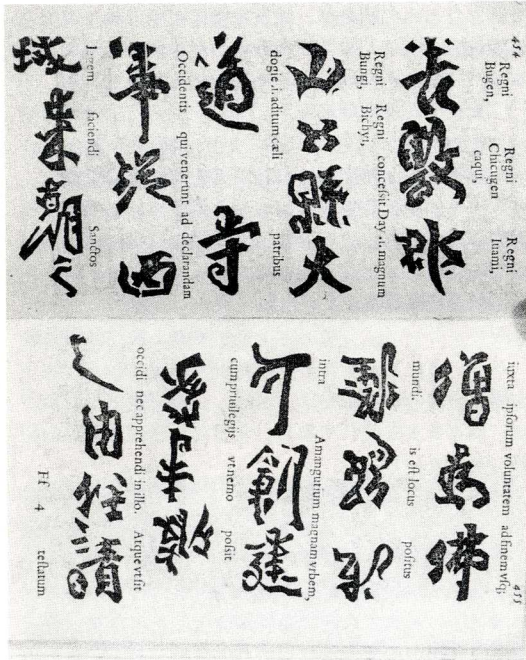
○鎗 1口 江戸時代末 刃長 9.5cm

「豊府住盛尚」の銘があり、代々府内藩のお抱え刀工を勤めた富田家9代盛尚(1866年没)の作である。

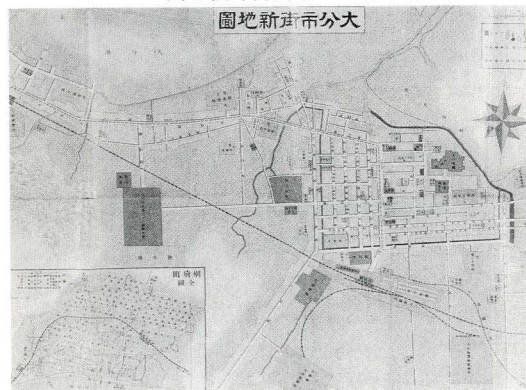
○短刀・同拵え 1口 明治2・4年

短刀-刃長20.8cm 拵え-全長38.3cm

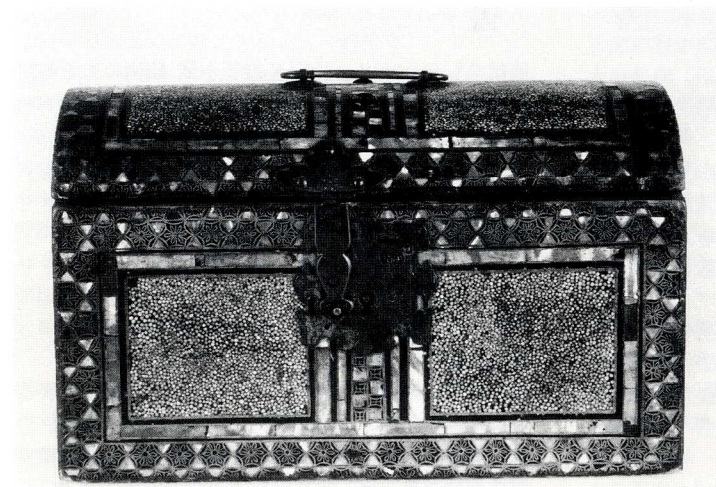
短刀には「豊州住守国 明治二年二月日」の銘があり、富田家9代盛尚の次男守国が明治2年に鍛えたことがわかる。さらに、拵えに「此刀須藤氏所給従府内公也」との銘があり、須藤氏が府内藩主から拝領した刀である。なお、拵えは明治4年府内城下町の彫刻師福田蕉雨の作になる。



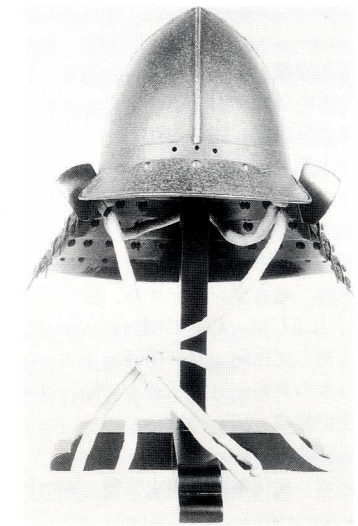
イエズス会宣教師書簡集・大道寺裁許状



大正6年大分市街新地図



鮫皮貼螺鈿洋櫃



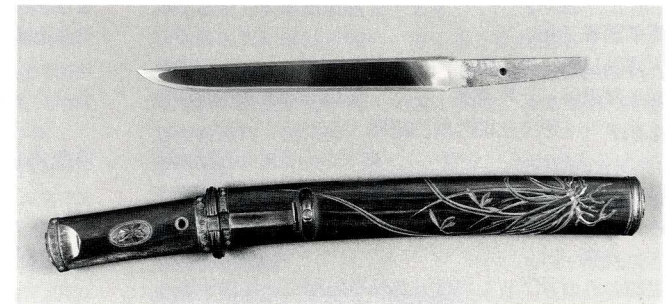
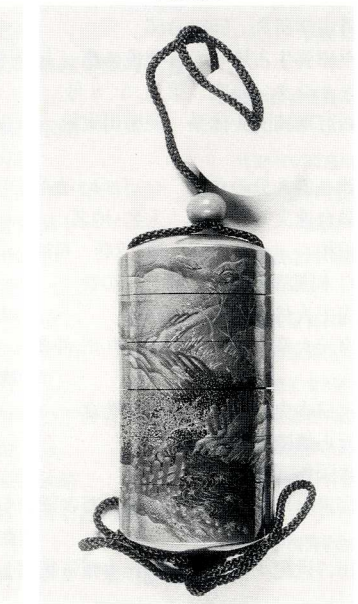
南蛮兜



児島高德騎馬図



桜楓山水図蒔絵印籠



盛尚作短刀と蕉雨作拵え

利 用 案 内

開館時間 午前9:00～午後5:00

(入館は午後4:30まで)

休館日 月曜日（祝日にあたるときは翌日）

祝日の翌日

年末年始（12月28日～1月4日）

観覧料 大人 200円 (団体150円)

小中高生 100円 (団体50円)

(市内の小学生は無料です)

* 団体は30名以上

* 特別展の開催中は別料金になる

場合があります。

交通機関 JR久大線

○豊後国分駅下車

大分バス

○歷史資料館前下車

歴史資料館前ゆき（松ヶ丘経由）

(木ノ上經由)

○歷史資料館入口下車

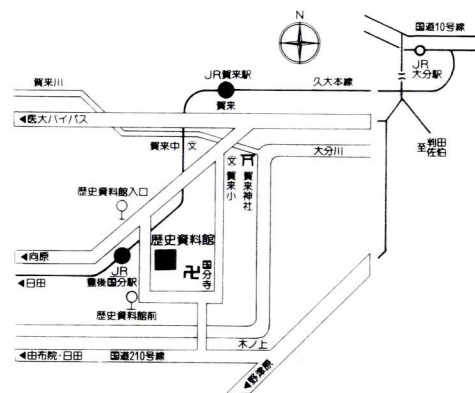
国分新町ゆき

向原ゆき（賀来経由）

今畑ゆき (")

中村ゆき (")

竜原ゆき (")



大分市歴史資料館年報

1993

発行日 平成5年10月31日

編集・発行 大分市歴史資料館

大分市大字国分960番地の1

〒870 (0975)49-0880